

日本自動車史の資料的研究 第13, 14報

大 須 賀 和 美

第13報 日本陸軍，軍用自動車導入の過程，～大正2年（1913）

1. ま え が き

日本の自動車工業が，戦前国防上の目的で軍部により手厚く保護されて発達してきたものであることは，日本の自動車史上明白な事実である。その発端となったのは，明治27・8年の日清戦争及び明治37・8年の日露戦争であった。初めて朝鮮半島及び満州と大陸の広大な原野で戦った陸軍は，人馬による輸送力の限界を痛感するとともに，機動力の導入を真剣に考え始めた。

当時既にヨーロッパ各国では，民間に発達し始めた自動車を改造した軍用自動車の製作や，有事の際民間自動車を徴発動員できる法律の制定などが行われており，日本政府もこれに倣い，苦しい財政の中からも，国防の見地から一歩ずつ自動車に近づいていった。

明治44年（1911）8月には国産軍用自動車第1号が大阪砲兵工廠で完成，大正7年（1918）3月には，我が国で初めての自動車に関する法律「軍用自動車補助法」が発令されるまでになったが，この経過について，大正2年（1913）末までの日本各地の自動車に関する新聞・雑誌記事中，軍用に関係するものを集めて日付順の資料集とし，軍用自動車導入の過程を確認することとした。

記事の内容は大別すると次の5通りとなる。

- ①外国軍用自動車情報の紹介
- ②外国軍用自動車の輸入
- ③国産軍用自動車の製作
- ④軍用自動車の試験旅行及び演習
- ⑤軍用自動車補助法の試案

2. 概 要

大体の流れを知るために，記事の見出しと新聞・雑誌名を日付順にまとめてみると，次のとおりである。ただし，同じ内容の記事は代表的なものとした。

- 明治35年9月24日（報 知 新 聞）露国自動車隊
- 36年11月15日（防 長 新 聞）軍隊と自転車
- 37年5月5日（東洋日出新聞）露軍の装甲自動車
- 37年11月号（雑 誌 輪 友）陸軍の自動車設計
- 38年2月10日（芸備日日新聞）自動砲車

(写真一)「軍用自動車補助法」(大正7年3月,法律第15号)官報から

官報

第千六百九十號

大正七年三月二十五日 月曜日

印刷局

法律

御名 御璽

大正七年三月二十三日

内閣總理大臣 伯耆寺内正毅
大藏大臣 勝田主計

朕帝國議會ノ協贊ヲ經テ登録稅法中改正法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律第十四號
登録稅法中改正法律
第六條第三項乃至第五項ヲ削ク
第十九條ニ在リ一號ヲ加フ
五 産業組合連業組合聯合會産業組合連業組合又ハ通業組合聯合會ニ付産業組合法又ハ通業法ニ基キテ爲ス登記
附則
本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル軍用自動車補助法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

大正七年三月二十三日

内閣總理大臣 伯耆寺内正毅
陸軍大臣 大島健

軍用自動車補助法

第一條 政府ハ豫算ノ範圍内ニ於テ陸軍ノ軍用ニ適スヘキ自動車ノ製造者又ハ所有者ニ對シ補助金ヲ下付スルコトヲ得
前項ノ製造者又ハ所有者 其ノ自動車ニ關スル業務ヲ承継人ハ之ヲ前項ノ製造者又ハ所有者ト看做ス
第二條 補助金ヲ受ケルコトヲ得ヘキ製造者又ハ所有者ハ帝國臣民ニシテ社員若ハ株主トシテ帝國法合ニ依リ設立シタリシ法入ニシテ帝國内ニ於テ自動車製造所又ハ自動車ヲ有スルモノニ限リ
前項ニ掲ケル者ハ公共團體ニハ補助金ヲ下付スルコトヲ得
第三條 補助金ヲ受ケルコトヲ得ヘキ自動車ハ主務大臣ノ定ムル規定ニ依リ製造シタリシモノニテ主トシテ貨物ノ運搬ヲ目的トシ一英噸以上ノ積載量ヲ有スルモノ又ハ之ニ改造シ得ヘキモノニ限リ
第四條 製造者ニハ其ノ製造ニ係ル自動車一輛ニ付二千圓以内ノ製造補助金ヲ下付スルコトヲ得
製造者其ノ製造ニ係ル新ナル自動車ニシテ製造補助金ヲ受ケルモノノ所存シテ使用シ又ハ他人ヲシテ使用セシムル場合ニ於テハ自動車一輛ニ付更ニ五百圓以内ノ増加補助金ヲ下付スルコトヲ得
第五條 所有者ニハ製造補助金ヲ受ケタル新ナル自動車ヲ其ノ製造者ヨリ購買シテ使用シ又ハ他人ヲシテ使用セシムル場合ニ於テ自動車一輛ニ付千圓以内ノ購買補助金ヲ下付スルコトヲ得

- 38年7月16日 (神戸又新日報) 戦争用自動車
- 39年9月19日 (都新聞) 自動車隊編成の議
- 39年10月26日 (大阪時事新報) 奥国の義勇自動車団
- ” (”) 独逸の自動車隊
- 39年12月24日 (時事新報) 自動車隊の編成
- 40年1月21日 (報知新聞) 戦争の自動車(矢吹中将の談)
- 40年6月3日 (やまと新聞) 軍用自動車の将来

- 40年6月26日 (時事新報) 特別大演習と自動車隊
 40年6月28日 (下野新聞) 自動車隊編成難
 40年10月1日 (大阪時事新報) 軍用としての自動車
 41年2月19日 (やまと新聞) 次期戦争の大利器
 41年2月26日 (報知新聞) 軍用自動車採用
 41年3月8日 (東京朝日新聞) 軍用自動車研究
 41年3月16日 (報知新聞) 軍用自働車試験
 41年7月26日 (東京朝日新聞) 陸軍將校連の自動車試験(宇都宮)
 41年7月28日 (扶桑新聞) 自動車隊の新設
 41年7月29日 (福島新聞) 自働車の椿事、唧筒小屋を破壊し、軽鉄の横腹を衝く
 41年7月30日 (河北新報) 自動車の工兵將校一行
 " (") 自動車將校一行の着仙
 41年7月31日 (") 軍用自働車隊、今沢大佐の談片
 41年8月6日 (") 陸軍自動車隊引返す
 41年8月9日 (") 軍用自働車一行の来仙に就て
 41年8月11日 (") 陸軍自動車青森着
 41年8月12日 (") 陸軍自動車隊来着期
 41年8月16日 (") 陸軍自動車隊着仙
 " (") 再び自働車隊一行を訪ふ
 41年8月17日 (") 軍用自働車の目的
 " (") 人(筆者注、人事往来欄)
 41年8月19日 (") 陸軍自働車隊の出發
 41年8月21日 (下野新聞) 軍用自働車来る
 41年8月22日 (") 陸軍自動車出發
 41年8月23日 (報知新聞) 自動車隊の成績
 41年10月30日 (") 軍用自働車の一進歩、近々長距離の試運転
 42年10月22日 (新愛知新聞) 陸軍と自働車
 43年2月24日 (静岡民友新聞) 自働車隊編成
 43年3月15日 (やまと新聞) 軍用自働車旅行、田舎では火事だといふ騒ぎ
 43年9月20日 (扶桑新聞) 大演習と自動車隊
 44年1月28日 (東京日日新聞) 予算分科会、飛行機と自働車、大石氏と陸相の問答
 44年1月30日 (横浜貿易新報) 陸軍と自動車
 44年7月14日 (東京朝日新聞) 軍用自動車の方針
 44年8月7日 (東京日日新聞) 軍用自動車の試運転、大阪から名古屋に出で木曾路を東京迄七日間
 44年8月8日 (") 軍用自動車は全く本邦の材料に成る、近く長途試運転をなすべき
 44年9月21日 (名古屋新聞) 自働車試運転延期
 44年10月5日 (東京日日新聞) 気球隊の自動車女を轢殺す
 44年10月11日 (大阪朝日新聞) 軍用自動車の大試運転
 44年10月18日 (") 軍用自動車
 44年10月19日 (名古屋新聞) 軍用自動車来らむ
 44年10月22日 (大阪毎日新聞) 軍用自動車通過
 44年10月25日 (") 自動車隊着発
 44年10月25日 (信濃毎日新聞) 陸軍自働車故障
 " (") 陸軍自働車来る
 " (") 自働車諏訪着

- 44年10月26日 (信濃毎日新聞) 軍用自働車, 自働車隊の見た道路
 44年12月23日 (扶桑新聞) 大砲の乗る自動車, 自由に大砲が撃てる
 45年2月1日 (信濃毎日新聞) 雪中自動車, 高田師団の新案
 45年2月6日 (") 雪中自働車, 未だ効果なし
 45年6月6日 (伊勢新聞) 自動車調査委員
 45年6月7日 (") 軍用自動車調査
 45年6月8日 (国民新聞) 列国自動車比較
 45年6月17日 (伊勢新聞) 自働車補助制度
 45年6月28日 (大阪朝日新聞) 軍用自動車
 45年7月14日 (東京朝日新聞) 軍用自動車の方針
 45年7月16日 (やまと新聞) 軍用自動車江戸川へ飛び込む(乗組の兵士負傷す)
 (明治45年7月30日, 天皇崩御, 同日大正と改元)
 大正元年9月18日 (馬関毎日新聞) 満州の軍用自動車, 中川歩兵大佐談
 元年9月20日 (") 軍用自動車送還
 2年2月9日 (福岡日日新聞) 軍用自動車研究費
 2年2月28日 (東京朝日新聞) 日本の軍用自動車(筆者注, 写真)
 2年6月12日 (時事新報) 自動車隊編成, 法案制定調査中
 2年6月23日 (") 民間自動車保護案, 次期議会に提出せん
 2年7月12日 (") 露蒙自動車計画, ^{フロン} ^{キヤフ} ^グ 庫倫, 恰克図間
 2年7月17日 (") 軍用自動車成る, 大阪砲兵工廠
 2年8月23日 (") 軍用自動車演習, 本邦式自動車試験
 2年9月17日 (東京日日新聞) 軍用自動車の演習
 2年9月17日 (国民新聞) 陸軍自動車隊の演習, 三日間熊谷に滞在
 2年9月18日 (") 自動車隊の宿舎
 2年9月18日 (埼玉新聞) 陸軍自働車演習
 2年10月13日 (東京日日新聞) 自動車隊の独立
 2年12月10日 (東京日日新聞) 自動車隊の編成
 2年12月12日 (東京日日新聞) 自動車奨励法案
 2年12月16日 (東京日日新聞) 軍用自動車試験班

3. 資料記事集

明治35年9月24日(報知)

●露国自動車隊

〈此の一篇は一昨日黒龍会に着したる最近の露都通信の一節なり
 露国の参謀本部は, 軍事上に種々の者を応用するに務め, 鳩の報告隊, 犬の斥候隊等の演習は, 何れも好成績を奏し, 軽気球隊, 自転車隊も亦目下盛に教練中なるが, 今や自動車は其の演習に於て好成績を得たるを以て, 遂に自動車隊を編成するに決したり

自動車演習の景況

八月上旬クルスカヤ県の大原野に於て自動車の演習は行はれぬ, 車数は八台なり, 内四台は軽走自動車として, 参謀武官の伝令報告用に供し, 余の四台は火薬糧食の運送用として輜重兵之を司掌し, 両車共に前部に安息香油発動機を有する最新式の者なりき

演習は南軍と莫斯科軍とより成り、南軍襲来し莫斯科軍之が防禦撃退の任を取り、両軍共に八馬力の軽走車二個と六馬力の運送車二個とを有し而して自動車の速力は一時間三十五露里と定めたり、演習は風雨激しき日を選びしが当日は朝来殊更らに風強く降雨甚しかりしも、参謀本部付き武官数名、軽走自動車に乗り、運送用自動車には燕麦三十ブート宛積載し、風雨を犯して出発したり、是に於て一隊は最も險悪なる道路に於て行軍を試むるに決し、田舎道を出で露都を去る十露里のコロミヤギ村に向つて進軍せり、道路は泥濘膝を埋め、自動車の車輪は全く泥水中に没せり、元来不完全なる道路の事とて、車の左右に動揺する甚しく、乗車の士官は転覆の覚悟を為して前進せしに、風雨は益々激しく非常の困難に遭遇したるも、幸ひに転覆の厄に陥らず、軽走車、運送車共に首尾好く演習を終りて聖都に帰着したり、此の結果に由りて参謀本部は愈々自動車の軍用に適することを確信し直ちに自動車隊を編成するに決したりしなり

明治36年11月5日（防長）

●軍隊と自転車

陸軍戸山学校教官にして大演習統監部付自転車手の手長たる歩兵中尉志波敬高氏の談左の如し
自転車を大演習に応用されたるは一昨年を嚆矢とすれども各師団に於ては其以前より利用し居たり去三十二年と覚ゆ第二師団の機動演習に当り一方の自転車兵の少数が通常の兵よりは一日程前方に進みて或重要な地点を占領したるにぞ敵兵は之を見て敵の全軍長驅して早くも此地点を占領せし者と考へ旅団の兵を迂回せしめたることありこれ実に自転車兵成效の一例なるが元来自転車兵を戦闘兵として用ゆる時は右の例の如く全体の兵より一日程も前方に進みて重要な地点を占領し敵をして迷はしむる事を得べく又遠き道を循環して敵の後方に出で其輸送に向つて妨害を加ふる事を得るのみならず敵軍の斥候騎兵優勢にして味方の騎兵進み難き場合の如き其騎兵に自転車兵若干を附して進ましむる時は両騎兵の衝突に際し味方の騎兵を助くるに効力あり何となれば自転車は元来歩兵なれば其銃は騎兵のそれよりも有力なればなり然れども実戦に於て戦闘兵として之を応用したることは欧州にも其例稀なるべし尤も英軍はトランスバールの戦に於て盛に之を利用し又北清事変に際し我軍も之を実用したれど是等は何れも伝令即ち通信用として応用したるのみ通信用として自転車の便利且つ迅速なる事は今更説明を要せざれども自転車隊を以て大隊又は聯隊を編成し実戦に之を利用し得るや否やは目下各国共研究中にして屈折式即ち折り畳みの出来る自転車と然らざる者との利害も亦研究中にあり即ち屈折式の自転車は山坂等を攀じ躋る場合には至極便利なれども其機械の精巧なるだけそれだけ破損し易く又負ふに便ならしめんとするには其輪を小にせざるべからずと雖も輪の小さき自転車のタイヤの破れ易きは数理上の原則なれば未だ何れとも其可否を談ざるを得ざれども機械さへ損傷せざるに於ては無輪屈折式を可とすべし而して今回の大演習は参加する自転車手は通常の自転車を以て通信用をなすを任務とする者にして人員は將校一名下士二名兵二十名都合二十三名なるが各師団司令部は勿論旅団聯隊に至るまで大抵一二両の自転車を使用せざる者なき有様なれば将来軍事通信用として大に採用せらるべきは明かなり予は軍隊の通信用として自転車は電話電信に比して遅からざるのみならず其確實なる点

に於て寧ち此二者に優る万々なるを信ずるべく随て之を教練せざるべからざるや勿論なるが夫の自転車熱心家梅沢大尉の実験調査と並に自分の研究とを参酌して今回教範を作り現に戸山学校にて之を教習し居れりいふまでもなく自転車兵は乗御に練熟すると同時に修覆を巧にせざれば其效能の多分を減○さるる者なり又自転車は体格に関係する所多く又輸入品のみを用ゆるは国家の損耗なるを以て成るべく研究に研究を重ね日本に於て日本人に適する善き自転車を造り得る様にしたき者なり云々)

明治37年5月5日(東洋)

●露軍の装甲自動車

〈紐育ジョーナルの露都来電に據れば、独逸、佛蘭西、白耳義に於て製造せられたる多数の装甲自動車は戦場に向って出発する由〉

明治37年11月号(雑誌 輪友)(筆者注:自転車・自動車の同好会月刊誌)

●陸軍の自動車設計

〈我陸軍にては小行李運搬の爲め満州の占領地各地に新式小規模の自動車を設けんとの計画あり不日陸軍省構内にて実験の上好成绩を得ば直に実行の筈なり〉

明治38年2月10日(芸備)

●自動車

〈奥太利陸軍省にては今回自動車を砲車とせる砲の製造に着手したりと伝へらる其砲種は速射砲にして之を自動車の上に架し廻転自在なるのみならず上下することも亦随意にして自動車の運転手が其望台を一種の器機作用に由りて下すときは全く其体を人目に觸れざらしむるを得べく且砲はすべて甲鉄板にて保護ありと云ふ同国軍隊にては此他なほ糧食弾薬等の運搬にも自動車を備付け居れりと〉

明治38年7月16日(又新)

●戦争用自動車

〈日露戦争の開始せらるるや露国政府は多数の自動車及び其修繕機械を独逸ハノーバーなる某商会に注文したり是れ軍事上最も注目すべき事項に属す蓋し自動車は将来の陸戦に於て非常に有益なる運搬器たるべきこと一般専門家の認識する所なればなり然れども自動車は今日までの実戦に於て未だ一回も使用せられたることあらず随て今回の日露戦争に於て露軍が自動車を使用した結果如何は欧米諸国軍事専門家の一日も速に聞かんと期待しつつある所なり尤も露国に於ては曾て自動車製作者ヘル、ウアルネッケ氏を聘し陸軍某將官出張して親しく其の結果を試験したることあり即ち材料好良にして強力なる四シリンダー原動機を有する自動車に溢るる許り貨物を満載して数日の間凸凹激しき悪道を走らしめしが此試験は途中種々の困難に遭遇したるに拘はらず結果は頗る好良にして自働車の貨車として頗る有益なるは当時一般に認識せられたりと言ふ今や露国は満州の野に此好運搬器を使用せんが為め其多数を独逸に注文せりと〉

明治39年9月19日(都)

●自動車隊編成の議

〈自動車の発明は交通機関の発達に一新紀元を画したるが佛独其他の陸軍にては熱心之が利用の方法に付講求せしめつつあり我陸軍にても戦後軍制の改革と共に自動車隊の編成すべしとの議起り陸軍部内の一部にては盛に論議せられつつあれば遠からず軍制調査会の問題となるべしと〉

明治39年10月26日（大事）

●奥国の義勇自動車団

〈在奥国某武官よりの報告に依れば奥国皇帝フランツヨゼフ第一世陛下は今般義勇自動車団の制を御裁可あらせらるる由にて不日之が発表を見るに至るべしと云ふ〉

●独逸の自動車隊

〈独逸陸軍にては今回更に自動車隊を編成するに決し同隊兵士は普魯西領内及び伯林政府の直轄軍務の下に在る各州よりの志願兵を以て之に充て普魯西のヘンリー公之を統卒さるる筈なりと〉

明治39年12月24日（時事）

●自動車隊の編成

〈近来欧州各国の陸軍に於ては自動車隊の編成を為しつつあり我駐在武官よりも右に関し種々の報告あるを以て陸軍にても近々之れが調査を開始すべしとのことなるが一般陸軍部内の意向は戦闘時に於ける補助機関として頗る有力なるべしとのことなれば調査の結果或は同隊の編成を見るに至るやも知れずと某將官は語れり〉

明治40年1月21日（報知）

●戦争の自動車（矢吹中將の談）

〈▲将来の戦争 に自動車を利用せらるるに至るべきは最早多言を要せざる処にして余は過日日比谷に於ける日本自動車会社の二十人乗自動車試乗の際之を軍事上の見地より観察し自動車が後方輸送機関として適當の物たる事を認識すると共に之を我陸軍に採用する事の益々急務なる事を感知せり古来の戦争に於ても後方輸送機関が不完全にして予定の地に軍需品を送達するを得ず為めに作戦上に一大齟齬を来して敗戦を招くに至りたる事其例尠なからず近き例を掲ぐれば日清戦争の時の如き朝鮮までは汽車の便に依りて軍需品を送る事を得しも当時朝鮮には未だ汽車の便なかりしは勿論道路の如きも頗る險悪にして陸上輸送機関備はらざりしを以て必要に応じて戦線に軍需品の輸送を為す能はず為めに軍隊は粟粥にて空腹を医し嚴冬尚夏服を脱する能はざるの悲境に陥りたる事あり今回の奉天戦に於て露軍が奉天陥落後一挙哈爾濱に退却し再戦の準備を為すを得ざりしも又全く後方輸送機関の欠くる処ありたるが為ならずや、

▲戦地の輸送機関 内地の交通機関は今後益々発達して鉄道は全国を縫ひ電車は市街を連絡して歩くも行くも人力を要せざるに至るとするも戦時之を移して戦地の輸送機関となす能はず固より陸軍には鉄道大隊なるものあれども道路險悪にして山嶽重疊せる戦地に鉄路を設くる事の困難

なるは勿論其工事に多少の時日を要するを以て敏活を要する戦争に於ては未だ之を以て充分の機関と目す可からず、

▲自動車の効用 戦時の鉄道輸送は出来得べくんば必要なり故に鉄道大隊は廃す可からず然れど鉄道と同時に自動車を併用する時は余は一層の効果あるべきを信じて疑はざるなり自動車が特長とする処は戦地内地の差別なく苟も道路のある処は平等に活動するにあり然らば戦争に際して如何なる方面に自動車を採用すべきや、第一被服糧食の運搬、第二傷病者の後送、第三野戦電信隊に採用し随所に於て車体を其儘通信局に使用する事即ち是なり今日被服糧食傷病者の後送等は悉く人力に依り居れるが之を自動車にて運搬するに至らば其利益幾何ぞや

▲政府の借上げ 左れど如何に利益を認むるも財政の都合にては之を採用する能はず幸に昨今民間有志の発起にて自動車会社の計画ある由なれば今より軍国の実業家たるの心掛けを以て戦時の後方輸送機関として適応する如く相当の設備と構造とを有せしめ置かんか政府に於ては喜んで之を借上げ後方勤務の補助として之を使用するに至るべきは余の名言して憚らざる所なり会社当局者たる者は充分に此点に留意せられん事を望む

明治40年6月3日(やまと)

●軍用自動車の将来

〈軍隊に於て自動車と稱するは生物以外の発動機を以て車体を運転するものの総稱にして彼の汽車の如きも之を自動車と云ふを妨げず其発動力として現今使用するは蒸汽、瓦斯、電気の三者にして何れも其使用の方途に応じ並用されつつあり抑も自動車を軍隊用として始めて実戦に使用せしは彼の一八七十年戦即ち普佛戦争にして当時普軍が巴里、ストラスブルヒの要塞を攻囲する際火砲及弾薬の運搬用として之を使用せしに始まり続いて一八八七・八年即ち魯土戦の際にも之を試験的に使用したることあれども是等は何も該車の初期に於ける試験的使用に過ぎりしが一九〇〇年即ち南阿戦に於ては英軍盛に之を使用して大に斯界の注視を惹き当時の統計に依れば英軍十五噸機関車を以て日々五十乃至六十吉米(十二里乃至十五里)の距離を四十噸の積載量を運搬したりとのことなるが之を馬匹の積載量に換算すれば馬匹約千八百八十頭を要するの割合なり尙くして独乙に於ては爾後益々自動車の研究を積み現今機動演習或は砲兵射撃演習の際等之を実地に使用して其結果大に見る可きものあり為めに益々其効力を発揚す可く工夫をこらしつつある次第なり然らば本邦の如き対岸の朝鮮又は滿州等に於て完全に之を使用することを得べきやは大に講究を要す可き問題にして到底欧州大陸に於て之を使用するが如き結果は収め難しとするも亦全然使用し難しとは断定し難し今独乙に於ける一例を挙げんに四軍団(八個師団)二騎兵師団編成の一軍に要する日々の糧食は五百八十五噸にして之を百三十五吉米(約卅四里)の距離に輸送するに人員約五千馬匹八千車両四千を要すれども之に自動車を代用すれば百兩足ずの車両を以て容易に運搬することを得べく其経費の点より観るも多大の利益を収め得るは瞭然たり左れば独乙に於ては目下大に自動車の製造運転を奨励し平時自動車運転に熟練せるものは戦時直ちに之を自動車運転手として採用する等の奨励法を設けたりとのことなるが我邦に於ても是非共其研究の歩を進め

一旦有事の日人員馬匹等の員数を減少する方法を講ぜんか其利する所必らず多大なるものあらん要するに目下の所本邦に於て該車に關し之を軍用的使用方法の研究を勉めつつあるは僅かに一砲工学校に於て昨年あたりより漸く其端緒を開きたるに過ぎずして甚だ幼稚なるを免れざれども將來大に研究發展の余地を存するは自働車の研究なり殊に輜重兵科將校の如きは最も其研究に力を致す可きものならんか因に云ふ軍用自働車の發動力としては瓦斯發動に限り他の蒸氣及び電氣發動は到底軍用としては不適當なりと

明治40年6月26日（時事）

●特別大演習と自動車隊

〈今秋宇都宮附近に於て舉行せらるる特別演習に際し参加部隊の外特に自動車隊を編成して配屬せしむことに決した由なるが其種類及び員数、動力等に就きては目下技術審査部に於て研究中なりと言ふ〉

明治40年6月28日（下野）

●自動車隊編成難

〈今秋の陸軍大演習に自動車隊を編成して参加せしむるやの噂あれど我陸軍には未だ一兩の軍用自動車有せず従つて是迄運転を練習せしめしこともなし但大陸戦争の後方勤務に自動車隊の必要あるは各国の認むる所にして我陸軍も勿論編成を希望し一時は民間に自動車会社創立の計画ありしに付条件を定めて之を有事の時陸軍に使用せんとの内議ありしも今日にては殆んど立消の体なり多分自動車隊の編成は当分不可能の事なるべしと当局者は云へり〉

明治40年10月1日（大事）

●軍用としての自動車

〈近世武器の進歩改良は須臾も止まず軍用軽気球空中を飛揚すれば甲装自動車は地上を駛走す而して此兩者は今尚ほ試験時代に屬し完成の域に到らずと雖も近き將來に於て武器としての驚べき効力を示す時代の到来すべきは疑ふべからず英国陸軍の自動車隊長ベキンター氏は英国に於ける斯界のオーソリティーなるが頃日氏が『戦地に於ける自動車の実用』と題せる一論文より理想的自動車が有すべき設備に就て論ぜる一節を転記せんに氏は曰く理想的自動車は燃力を石油のみに限られず世界如何なる場処にても供給せられ得べきパラフキン油を燃料として駛走し得るものならざる可からず一度此の設備完全せんが自動車軍用問題の解決は之れに依つて一大進歩を為すを得べきものにして従来幾多の發明家はパラフキン炭化水素を試みたるが余の知悉する限りにては不幸にして實際的成功と評すべきもの一もある事なし或点までは成功せるも皆其処に於て失敗に終れるなり然れ共余の意見にては唯だ是れ時間の問題にして余は將來石油、パラフキン、其他如何なる燃料にても駛走し得る内部燃焼機関を備へたる自動車を有するの時あるを確信するものなり而して車体全部の設計に就ての余の意見は車体は機関手の外に四人は塔乗し得べき大型にして機関は四個の気筒に少くも廿馬力且つ一時間四十哩の速力を出す四輪車を用る殊に後方の車輪は車体をして如何なる処をも駛走せしむるものならざる可らず如何なる処と云ふも其は道路の

存在する所を意味するなり尤も場処に依りては動力丈にては車の動かざる悪道路もあるべければ車輪に鼓形輪を附して斯る場合に備ふるを得べし而して尚車体が他の車の轍を深く印したる道路又は少しく水の在る所を容易に通過し得るよう全体の機関を現今普通に行はるるものよりも今少しく地上より高く据付くるの必要あり而して上来述べたる如き設備を具備する自動車の一度完成せんか其効用極めて多々なるべく且つ将来の戦闘的運動は全然一変すべし而して斯くの如きは斯界の熱心家が今日単に口舌を唱ふるに過ぎずと雖も何人か実際の経験に依って之を立証し得るの時あるは毫も疑を容れず其時こそは世人が軍用自動車は戦時に斯の如き事を為し得べしとの議論にあらずして実際に成就したる事柄を目睹するの時ならん余は茲に断言し置かん斯の時代の来る時には自動車は今日の平和の日に於ける如く戦時に於ても亦た欠くべからざるものたるを云々

明治41年2月19日(やまと)

●次期戦争の大利器

〈自動車は今次戦場の最大利器たることは各国兵家の等しく認むる処にして専ら是れが研究中なるが我国陸軍にても只管是れが研究に苦心し居りしも今日まで未だ其材料を得る能はざりし為め只だ僅かに学理上に止まりし処過般我が兵器本廠より佛国ウラトンビル会社に注文せし軍用輪送自動車二両新着せしを以て直ちに之を砲兵工廠兵器審査部に交付したるが同部は目下其機能調査の爲め木挽町東京自動車製作所に嘱し運転術其他に対し研究中なり該車は図に示す如く不恰好のものにて普通の自動車に比し馬鹿々々しくタイヤの巾広くスポークは木製にて如何なる峻路にても馳走し得べしといふ馬力は二十馬力にて優に一噸半を載せ得べく陸軍省にては伝令用軍司令部用輜重運搬用等に使用せん目的なりといふ

明治41年2月26日(報知)

●軍用自動車採用

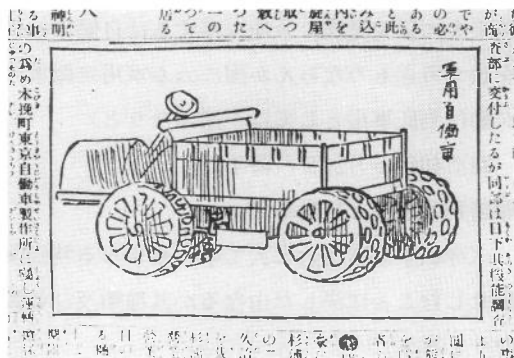
〈陸軍に於ける自動車採用の議は日露戦争後間もなく其筋の詮議により各方面より研究されつつありたる問題なるが其議も既に熟し愈々採用することに決定し過般来運転訓練中なり右軍用自動車は普通の自動車と其構造を異にし車輪に用ゆるゴムの如きも鋸齒状を為したる扁平なる輪を用ひ運転手台に連結させる車は荷物運搬車として其速力は普通の自動車よりも遅し今秋季大演習には交通兵旅団に於て使用さるに至るべしと言ふ

明治41年3月8日(東朝)

(写真一) 軍用自動車

明治41年2月19日付やまと新聞から

(筆者注：フランスから輸入されたノーム自動車のスケッチである。)



●軍用自動車研究

〈欧州各陸軍団に於ける自動車の軍用研究は漸次其歩武を進め来れるが我陸軍に於ても過般二万三千円を投じて軍用式のもの二台を購入し技術審査部に付して之が適用方法及構造に関して攻究中なり而して目下は専ら後方に於て軍隊及糧食輸送等輜重車としての価値を審査中なるも其他の方面に於ける使用に就ても研究を加へつつあり固より其結果に俟たざれば取捨を決し難きも仮令採用に至るも自動車隊等の編成は容易に之を見るに至らざるべし〉

明治41年3月16日（報知）

●軍用自動車試験

〈曩日陸軍に於て自動車を輸入したることは既記し置きたるが自動車を軍隊に採用するや否やは試験研究を重ねたる末にあらざれば決定する運びとならざるべし欧州各国の軍隊に於ても目下試験中にて未だ採用したる陸軍なしと言ふ〉

明治41年7月26日（東朝）

●陸軍將校連の自動車試験（宇都宮）

〈今沢工兵大佐，中芝同中佐，大塚輜重兵少佐，高橋同少佐，牧野砲兵大尉其他下士卒七名の乗組める自動車二両は昨二十四日当地に來り正午より午後四時まで市中を運転し青森に向けて出発したり其旅行の目的は馬背による兵器の運搬力と自動車の運搬力とを比較研究せん為めにて東京青森間の長途運転を試みる筈なりと〉

明治41年7月28日（扶桑）

●自動車隊の新設

〈我陸軍に於ては軍事調査会の決議に基き自動車隊を新設する事となり陸軍大臣は之れが考案を技術審査部に命じ調査研究中なりしが此程に至り大体の方針定まりたれば岡田工兵大佐中柴同少佐大塚輜重兵中佐牧野砲兵大尉の各審査官を同乗せしめ廿二日東京出発青森に向ひたるが其目的とする処は従来馬背による運搬力と自動車による運搬力を比較研究するにあるが行程日数は約十三日間にして帰京の上は更らに京都中国の方面にも自動車長途行程を試むる筈なりと〉

明治41年7月29日（福島）

●自動車の椿事 唧筒小屋を破壊し、軽鉄の横腹を衝く

〈陸軍省今沢工兵大佐は自動車試運転の為め一昨日東京を出発し青森へ出向の途次昨夜当市に一泊され昨朝八時二十分頃出発したるが偶々八時廿分当市発の軽鉄汽車と相前後して長岡へ向ひたるに先駆の自動車が瀬上本町へ差掛りたる際、軽鉄にては前記自動車と衝突を避けん為め瀬上停留所を距る三四間手前に停車中後駆の自動車は続いて疾走し来りに道路の迂回せる為め危険にも同町消防の唧筒小屋に衝突したるより乗組員は喫驚して遽に車を留めんとしたるも惰力に依りてズルズルと約二三間程唧筒小屋を押し行きて折柄停車中なる軽鉄の横腹にグサと計り衝き当り四尺余をメチャメチャに破壊したるが乗客は何れも危険を感じたるより早くも汽車より飛び降りて為め幸ひに何等の負傷もなかりしが附近には一時なかなかの混雑を極めたりし、因みに今沢

大佐は唧筒小屋破壊の為め損害として陸軍省より四十五円を支出することとしたるも軽鉄に対しては目下損害の取調べ中なるが自動車には何等の故障もなかりしと

明治41年7月30日（河北）

●自動車の工兵將校一行

〈今沢工兵大佐の自動車一行は昨朝来仙の筈なりしが橋梁破壊しある為め一昨夜大河原に一泊したれば工兵第二大隊にては演習旁々同所に急行応急修理を加へたりと猶今沢大佐は来仙後当工兵隊に臨み一場の講話を為すべしと云ふ〉

●自動車將校一行の着仙

〈別項記載の自動車の工兵將校一行は昨日大河原を発し名取川に差し掛りたるが同所は目下橋梁修築中にて仮橋を架せるを以て目的を果さず己むを得ず人足を雇ひ自動車を擔はしめて仮橋を渡り夫より当市河原町に到着し暫時観水楼に休憩の上直ちに工兵隊に赴きたり〉

明治41年7月31日（河北）

●軍用自動車隊、今沢大佐の談片

〈昨紙報せる如く今沢工兵大佐の自動車一行は一昨日午後四時過ぎ工兵第二大隊に到着せしに依り昨朝工兵營に今沢大佐を訪問したるに大佐曰く

一行の目的は先年佛国より購求したる自動車に対し將來軍用に適當なるや否やを試験せんが為にして通常旅行用自動車の如く快速力を主とするものにあらず不齊地若くば塊礫地坂路に於ける挽載力を試し果して之れが操縦を兵卒に一任し遺憾なき運用をなし得るや否やを考ひ以て他日の資料に供せん為めなり故に一日の行程二十里前後の予定にて去る二十一日東京出発三十日青森到着の予定なるが過日来の降雨にて利根、鬼怒の両川出水居りし為め和船を繫留して渡河する等の余儀なき状態に陥り殊に悪路の聞えある白河福島間の道路にて非常の障害に会ひ行程の思ふがまま進渉せざるさへあるに大河原附近にて橋梁破壊し居りし為め予定の行路を駛る能はざるは遺憾なりし、吾々一行明朝未明（本日）当市を出発し一の関盛岡を経て青森に到る心算なれども帰途は海岸線に向ふや將た弘前を経るや目下考案中なり云々〉

明治41年8月6日（河北）

●陸軍自動車隊引返す

〈陸軍自動車東京青森間試乗員今沢工兵大佐一行は三日黒沢尻附近にて橋二ヶ所破損し一回は少佐輕傷を負ひ尚前程道路險惡の為め盛岡より引返せりと〉

明治41年8月9日（河北）

●軍用自動車一行の来仙に就て

〈過日当地を通過したる陸軍省今沢工兵大佐の軍用自動車一行は本日来仙する旨報じたるも右は誤まりにして明日青森を出発し十七日着仙の旨通知ありたり尚ほ当地は一週間滞在し試験的運転を為すべしと〉

明治41年8月11日（河北）

●陸軍自動車青森着

〈陸軍自動車隊今沢大佐以下十名七日午後二時半青森着九日朝帰途に就けり当初往復三週間の予定にて東京を発せしも途中道路橋梁の關係にて日数と費用を多く費したる由にて一旦盛岡より引還さんとせしも其筋に伺ひ更に目的地迄進みたるものにて盛岡以北特に青森県にては数ヶ所の橋梁破損の為工兵隊の援助を得修繕の為少からぬ日数を要せり之にて東京出発以来十八日目也〉

明治41年8月12日（河北）

●陸軍自動車隊来着期

〈陸軍自動車隊今沢大佐以下十名は九日青森を發し盛岡を経て来る十八日頃再び来仙菊平旅館に投宿七日間位滞在すべき趣なるが其節陸軍兵器審査部長も来仙の上其結果の審査をなすべしといふ〉

明治41年8月16日（河北）

●陸軍自動車隊着仙

〈去る九日青森を發したる陸軍自動車隊今沢大佐の一行は一昨夜志田郡古川に一泊昨朝同町を發し午前十一時着仙国分町菊平旅館に投宿せり〉

●再び自動車隊一行を訪ふ

〈東京青森間に於る試運転の爲め来仙せる今沢工兵大佐の自動車隊一行を去月訪問したるが別項所報の如く昨日午後再び当地に着したれば青森以南の経過を聞くべく再訪したるに一行中の牧野工兵大尉曰く▲青森出発は去る九日にして往程に比し稍々快速力を以て来りしが道路險悪の陸奥街道とて到底予想の效果を得る能はず然れども往程の際多少経験を積みたれば大体の成績に於ては遺憾なき方なりし▲今沢大佐の負傷は極めて微々たる傷にて其場処は花巻附近の小倉沢にて本橋に差懸りたれば前車を重くし後車を軽くして通過する際橋桁等の腐朽しありしと見え前車の通ずるや後車は軽きにも拘はらず俄然中間の橋桁と共に墜落したり然し斯る場合に処する引揚機械を積載物中に要意しありたれば直に揚げ夫々修理を加へ進行を継続せり▲乗組員は元來試運転の事とて途中に於る障碍は覚悟し居りしが酷暑の爲め却て衛生上に影響し来り胃腸病等の患者を見るに至りしは尤も遺憾とする処なり殊に高橋輜重少佐の如きは健康を害し盛岡病院に於て治療中なり▲自働車旅行の爲めに道路の善悪を云為するに非れども鉄道線路と直角を為す道路は凡て人通に將た運転に便なりと云ふを得ず不整地砂礫地の如何は兎も角不整則なる道路は実に羊腸も啼ならず就中木橋の腐朽個所等あるは相当の修理を切望せざるを得ず云々と猶ほ自動車隊一行は一兩日滞在の筈也〉

明治41年8月17日（河北）

●軍用自動車の目的

〈既報の如く陸軍技術審査部長陸軍中將有坂成章氏は自動車隊の成績調査の爲め一昨日来仙菊平旅館に宿泊中なるが往訪の記者に語って曰はく

本日工兵隊に於いて自働車隊の旅程成績調査を行ひたるが先づ良好の成績を収め得たるものの如

し唯だ東北地方は一般に道路悪く橋梁の如きは修繕を加へし後に非ざれば通過し難き有様に為めに予定日数を超ゆるに至りたるは亦止むを得ざるなり又た自動車の如きも幾分の故障を生じ修理を要する模様なるも敢て言ふ可き程ならず▲此の軍用自動車に就いては各国競ふて試験中なれど確然たる成績を挙げたるはなし佛国陸軍の如きは余程以前より研究したりと雖も普通自動車のみに止まり軍事上に何等貢献する処なかりしなり単に軍用自動車試験の歴史より見れば英独の両国は最も早しといふに過ぎず▲斯くの如く各国は数年間試験研究を継続して止まざる所以のものは此の自動車を利用して戦時に於いて後方の輸送を遺憾なからしむるが為めなり過去二大戦に顧みるに後方の輸送は支那の荷馬車或は馬により多大の労力を費やして猶ほ軍の行動を全うせしむる事能はざりしなり況んや是等のものを使用するに材料の供給思ふに任せざるあり若し自動車を採用して之れに換へんか原動力たるべき石油あれば何等不自由を感じずる事なく迅速に輸送し得べし▲彼の普通自動車は車体の重心下に垂れて最も地に近く且つ車量軽ければ曲折なる道路と雖も転覆するが如き恐れなく軽快に疾走し得れど泥濘に際しては重心土に没して用を為さず之れに反し軍用自動車は戦争に使用する目的なれば重心を上にし或る程度迄道路との関係を薄くしたれば曲折せる道路にては転覆する事あるのみならず輸送上の関係より構造異り車両重くして軽快に疾走する能はざるなり此等は即ち試験研究を要する処にして陸軍にて自働車の採否は今後幾度の試験を経て決すべく目下は工兵科に於いて試験中なるも採用する暁には輜向兵科に属すべきか工兵科に属すべきかさへ定まざる有様なり▲今回の試験は帰京して一先づ終了し自働車の修繕を終へて更に他の方面に向つて試験を重ねべき予定なり当地滞在は十七日限りなれば十八日は帰京の地に就く考へなれど場合によりては一日位延期するに至るやも知れず予も亦同乗して帰京すべき見込なりと語り以上は軍用自働車試験上の談話に過ぎざるも未だ新聞紙上に発表すべき時機に非ずと附言したり)

●人 (筆者注、人事往来欄)

▲陸軍技術審査部附 工兵大佐今沢義雄工兵大佐中柴末純工兵大尉牧野敏文の三氏以下五名一昨日陸軍自動車にて来仙せる事既記の如くなるが十八日朝出発帰京の途に就く筈 (菊平)

▲陸軍技術審査部附 輜重兵少佐高橋源次郎氏昨午午前八時盛岡より来仙 (同上)

明治41年 8月19日 (河北)

●陸軍自働車隊の出発

〈陸軍技術審査部長陸軍中將有坂成章，同部付工兵大佐今沢義雄，工兵少佐中柴末純，輜重兵少佐高橋源次郎，工兵大尉牧野敏文氏等十余名の陸軍自働車隊は去る十五日来仙国分町菊平投宿中なりしが昨午午前六時を以て同旅館出発帰途に就けり〉

明治41年 8月21日 (下野)

●軍用自働車来る

〈去月二十四日宇都宮市を通過青森に向へたる今沢工兵大佐其他の乗込める軍用自働車隊は目的地より引返へし昨廿日午前十時那須郡黒磯通過午後二時塩谷郡喜連川を通過し夕刻宇都宮市着

の予定なりき)

明治41年8月22日(下野)

●陸軍自働車出発

〈陸軍自働車の一行は既記の如く二十日午後八時無事当市着白木屋支店に泊し昨朝六時東京に向って出発したり〉

明治41年8月23日(報知)

●自動車隊の成績

〈東京青森間の長途自働車運転を終へ廿一日帰京したる大塚中佐の談左如
各国陸軍に於ては既に自働車を使用しつつあるも我陸軍に於ては未だ之を使用するに至らざりしが日露戦役後幾多軍器の進歩改良に絆ひ自働車を使用するの必要を認め昨年二両の自動車を佛国より買入れ既に技術審査部に於ては今沢、大塚、中柴等の各審査官をして其局に当らしめ東京附近に於ては屢々是が運転を試みたりしても未だ長途の運転を為したる事なかりしを以て今回今沢、大塚等の審査官は中柴工兵少佐を運転掛主任として去月二十二日一噸半の貨物を積載して東京を發し青森に向ひたり、当初の行程日数は東京より青森迄往復二十日間滞在日数四日の予定なりしも道路険悪の爲め予定より四日間多くの日子を費したり

行程の目的は今日我軍隊に於て使用せる駄馬に依る貨物の運搬と自働車に依る貨物の運搬との比較研究にありしが道路橋梁の不完全なる殊に盛岡以北に於ける道路の不完全は言語へ堪へたるものあり盛岡に於ては工兵隊の援助を得て幸ふじて通行せし所あり為に遂に予定の日子以外四日を要したる次第なり

福島附近瀬野上村に於ける軽便鉄道と自動車との衝突は世間我等が自動車運転の不熟練に基因するが如く伝ふる者あるも是れ全く誤解にして衝突の場処の道路は湾曲の所にして自動車は例の速力にて進行中客車一両貨車一両を連結したる軽便鉄道の列車は突然顛れたる為に運転手は直ちに方向を変じたるも何分道路狭き為め右方の消防小屋へ突入し同小屋を倒したる次第にて決して自働車の不注意不熟練の結果にあらず又今回の行程は頗る良好なりしも未だ以て直に軍隊に使用する能はず今後尚幾多の研究を要する者あり云々)

明治41年10月30日(報知)

●軍用自働車の一進歩、近々長距離の試運転

〈軍用自働車に関し陸軍技術審査部の某大佐の談左の如し

▲再度の東北行 軍用自働車隊の事は未だ編成杯と云ふ処までは進んで居らぬ今漸く我が陸軍に二台の自働車が有るのみで是れとて昨年七月英国のノーム会社から購入したが当時会社は創立間際らしく大触込であったが今は解散したらしい、で今年早速東北地方へ運転を試み土地と自働車の関係即ち坂路砂利道凹凸途にも能く耐へて戦時後方勤務に適當なる事丈は確実に認められたが偕て其機械が如何なるものを最も適當となすかが目下の研究問題で運転毎に一回一回と好き経験また苦き経験を心得足らぬを補ひ更に一層精巧ならしめ専ら軍用自働車として差支なきやう苦心

して居る依て過般の長距離運転に破損した個処の修覆が出来次第年内に再び東北地方へ運転する積りである

▲日本の道路は粗悪 同じ道を執って東北へ再び出懸るのは面白くないが如何せん東海道は全く自働車の通行に適せぬ第一橋梁が非常に不完全で長距離運転を試みる場処が無い故余儀なく東北地方を択むのだが曾て外国人が青森から自働車で東京に向ひ国道筋の橋梁や道路の中央に背丈を覆ふ雑草の生ひ繁り運転を妨ぐる場処多きに驚き其間は自働車を汽車に積み辛うじて此の旅行を終へたと聞いたが総体日本の道路の粗悪で殆ど言語道断で馬車が発達せぬも此為で将来自働車の発達を充分ならしめんとせば先づ道路改修後でなければ駄目である

▲馬匹改良の一方法 現在の道路では来遊の外国人に対しても不面目であるのみか馬匹改良の上にも大関係がある、競馬などと騒ぐよりは寧ろ道路の改修を実行し馬車の通行に便ならしめ汗を流して人間が輓く荷をも是に移し充分馬の自由ならしむるなら期せずして馬匹の改良が行はれる何を苦むで非難の多い競馬に力を入れ鹿の様な馬計りつくるも詮ない事ではないか、彼度馬は實際使ふて何人の役にも立たぬ夫れより大砲でも曳かせる巖畳な実用的の馬をば道路の改修に依ってつくつて貰ひたい、道路を完全にすることは諸般に便なるのみならず馬匹と自動車の発達に至大の関係ある事を記憶して欲しい

▲自働車と実用 陸軍で自働車を使ふのは経済と云ふ事が主で戦時の後方勤務は本鉄道並に軽便鉄道と相俟て輸送に便する畢竟卅七八年役に於る支那馬車の代用をせしむるもので現在ある自働車が車体其ものが二噸で積載量が一噸半であるから馬十頭に匹敵する夫れに輜重車が一回往復する時間に三回は出来る故約三十倍の仕事をする訳で至便是に越すものはない

▲戦時の自働車隊 我が陸軍は近き将来に必ず此自働車隊を組織する訳で先づ先進諸外国の事情を調べた処に依ると独佛両国の陸軍は平時には編成して無いが政府は常に自働車の所有者に対し補助金を与へて置いて戦時には是を徵発軍用に資する仕組である、是等の国でさへ平時に編成し難きものを況んや貧乏な我日本に成し遂げられる可き事で無い縦令編成が出来たとて輜重車の置場所にさへ困るものが自働車の仕舞ひ所があるまい、勢ひ範を是に則り陸軍が制定の要領に基きし自働車の購入をば政府自ら補助金を与へ置き万一の場合必要に応じて徵発し直に応急の軍用自働車隊を編成するのである

明治42年10月22日（新愛知）

●陸軍と自働車

〈陸軍に於ける自働車の採否に関しては目下技術審査部に於て引続き専門家の調査研究中なるが軍隊に自働車を用ゆるに至りたるは独逸陸軍を以て嚆矢とす曩に独佛の各陸軍に於て大演習に参加せしめ交通運輸機関として何れも相当なる効果を挙げたる由なるが我国にても戦後軍事の進歩に伴ひ貨物の輸送及電信電話以外の伝命機関として使用せしが今回の特別大演習に於ても此点に付実地の試験をなすべしと云ふ〉

明治43年2月24日（民友）

●自働車隊編成

〈戦役陸軍技術審査部に於て研究中なる自働車は今回愈々四台より成る自働車隊を編成し目下仙台地方へ遠距離強行軍を試みつつあるが聞く所に依れば該試験の重なるものは戦時輜重兵隊の採るべき後方勤務作業なりと〉

明治43年3月15日（やまと）

●軍用自働車旅行、田舎では火事だといふ騒ぎ

〈陸軍にては今回自働車を軍用に供せんとて昨年来四台を設計製造中の処本年漸く出来したるを以て陸軍技術審査部に於いて今沢工兵大佐、大塚工兵中佐、平瀬歩兵中佐、津田歩兵中佐、高橋輜重兵少佐、中島工兵少佐、佐藤歩兵少佐の七名を自動車研究試験委員とし下士官十名と共に去月十一日四台の自働車を繋ね東北地方に向って出発したり先づ水戸より浜街道を取り仙台、盛岡に至り帰路盛岡より陸羽街道を辿りて再び仙台に出で百十余里の長距離を跋涉し本月十四日帰京したり右に就て今沢大佐の談に曰く

自働車は予定の容積だけの荷物を積みて浜街道に向ひ当夜は水戸に一泊し同地より仙台まで九日、仙台より盛岡まで九日の日子を費し帰途盛岡より仙台まで四日仙台より東京まで四日間を費したるが此の間に随分の艱苦を嘗めたり就中我々が最も悩めるは道路の狭隘にして険悪なるに加へて利根川、鬼怒川、那加川、阿武隈川等の橋梁あり是等は到底重き自働車を走らすに堪へざるを以て藪からぬ費用を抛って材木の損料借りを為し修理を加へて通行したること幾度もあり然れど其中には修繕の見込みなきものあり或は絶対に橋梁無きものありたるより余儀なく二艘又は三艘の渡船を借り受けて之を繋ぎ其上に板を載せて門橋なるものを急造し僅に渡河を終りたるなど時間と労力とを費したること藪からず但し該自働車は普通のものとの趣を異にし馬匹の代用たらしむる目的なれば深さ三四尺位の水を進行し得るやう機関を上部に据附あれば多少の水は物ともせず驀然猛進したる事もあり現に奥州花巻の手前にある大河は砂礫あり岩石ありて平素は左程にあらざるも洪水の折には橋梁を押し流すを例とし昨今は四尺余の水ありて橋梁なし然れば我々は水を蹴って難なく之を渡るを得たり尚ほ奥州の山間僻地に於ては自働車の如きを嘗て見たる事なきより自働車の進行し来れるを觀て火事よと騒ぐもあり海嘯よと叫ぶもありしは可笑しくも又氣の毒なりき又某村にて老婆の子供を連れ走せ来り皺だらけの額に大いなる瘤を拵へ眺め居たれば『如何したのか』と問へば老婆は笑ひながら『珍らしいものを見れば七年生きると云ふから一生懸命駈けて来たので石に頭を打ち込んで斯んな瘤が出来ました』と、答へしも滑稽なりし、兎にかく種々の艱苦を経たるに拘はらず完全なる試験を遂げて其効力十分なるを認め得たるは我々の満足する所なり云々〉

明治43年9月20日（扶桑）

●大演習と自動車隊

〈今秋第十七師団管下（岡山）に於て挙行すべき特別大演習には陸軍自動車隊を編成し輜重兵隊と聯絡して後方勤務に任ずる筈なるが自動車隊が輜重兵と聯合して戦時勤務を為すは日露戦役

後今回を以て嚆矢と為すと云ふ)

明治44年1月28日8(東日)

●予算各分科会(27日)、飛行機と自動車、大石氏と陸相の問答

〈▲第四分科会(陸軍省) 午前十時三十分開会寺内陸相より陸軍省所管の本年度予算に関する新事業の重なるものを説明し夫より寺内陸相と大石正巳氏との間に飛行機と自動車とに就ての数回の問答あり後軍備問題に関しては秘密会として質問応答をなし正午散会

△飛行機と自動車、大石氏と陸相の問答

飛行機と自動車との研究 に関する大石氏の質問に対し寺内陸相は目下飛行機は之を欧州より買い求め専ら飛行法に就ての研究をなし居れり之を軍事上に使用することは未だ何づれの国に於ても進歩し居らざる有様なるが吾国に於ては未だ其の飛行することすらも未熟なりこは畢竟工業の発達が飛行機の進歩に伴はざる為めにして吾国に於て其研究の一日も忽せにすべからざるを認め昨年議会を協賛を求めて目下研究を着手し居れり然るに自動車は今日に於ても運輸材料として使用し居れるのみならず吾国に於ても之を製作することを得唯材料の一部を外国に仰ぐのみなりと説明するや大石氏は更に諸外国に於ける飛行機研究の現状を引用して吾国に於て其研究遅々たるは畢竟知識なきの為めならずやと質し寺内陸相は右研究の必要は勿論認め居れるが為め研究所を設け又委員をも設置し斯道の学者を招きて種々研究調査をなしたる結果学理的の原理原則は既に明白となれり唯其製造に就ては材料の一部分を外国に仰ぐの要あると共に十分其の乗手をも養成するの必要あるや明かなりと説き大石氏の右研究の設置等に関する質問に対し寺内陸相は

吾国は気象の変化 甚だしきにより何処にても飛行せしむること難きにより所沢を以て飛行場と定めたるが将来は尚朝鮮等にも定むるの方針なりと説明せし後大石氏の歐洲諸国に於ける自動車と飛行機との使用準備如何との質問あり陸相は飛行機は未だ空中戦に使用すること難きを述べ引き続き飛行機使用の困難なる点は発動機にして其の発動機は吾国にて製作すること困難なるのみならず諸外国の現状を見るも発動機に使用する気発油は各国共に利害を異にし一定する所なし而して其の飛行に当ては広き場処を要するにより戦場にて使用すること難きにより軍事上の主要機関として用ゐること難しと附言せり)

明治44年1月30日(横浜)

●陸軍と自動車

〈廿八日の衆議院予算第四分科に於て石本次官は将来の陸軍自動車運用に就き説明する所ありしが猶は聞く所に依れば我陸軍に於て軍用自動車を試験するに至りたるは日露戦役後にして爾來幾多の試験を重ねし結果今後自動車を軍用として差支なき迄に至り其主要なる目的は戦時輜重兵の為べき後方勤務にして糧食、弾薬、架橋、縦列等の任務を完全に遂行せしむるに在りて之に附随する兵卒の教育も爾後猶一層確実に励行さるべし)

明治44年7月14日(東朝)

●軍用自動車の方針

〈我陸軍に於ける軍用自動車の研究は東京技術審査部に於て川人工兵大佐、大塚輜重兵中佐以下各審査官研究の結果本邦独特の純日本式軍用自動車を発明し已に大阪砲兵工廠に於て二両の製作を終りたれば遅くも八月中には曩に佛独両国に於て購入したる二両の自動車と共に輓載力及速力の試験を為す予定なり本邦に於ける軍用自動車は未だ研究時代を脱せざるも歐洲列国の陸軍に於ては既に自動車を輸送機関の一として採用し其多くは鉄道貨車に類せるもの及び荷車に類せるものの二種あり其鉄道貨車に類せる自動車は主として鉄道線路より軍隊の所在地に至る所謂後方の輸送勤務に服し荷車に類せる自動車は稍軽便にして進退の自由意の如くなるが故に軍に随従して第一線に於ける糧食弾薬等の輸送を司れり佛国の如きは更に進んで第一線に於ける負傷者の收容機関として衛生勤務にも採用するに至りたるも本邦及滿洲の平原に於て使用せんとする自動車は地形及道路の関係上歐洲諸国の陸軍に於て使用する軍用自動車を直に採って使用する能はざる事情あり故に目下陸軍技術審査部に於て研究中なる軍用自動車は歐洲諸国の軍用自動車を折衷したるものにして其任務は主として鉄道線路より軍隊に達する所謂後方の輸送機関となし以て戦時の場合に於ける輜重の補助機関となす計画なりと云ふ〉

明治44年8月7日（東日）

●軍用自動車の試運転，大阪から名古屋に出で木曾路を東京迄七日間

〈大阪砲兵工廠に於て製作せし純日本式軍用自動車二両の長途試運転は曩に佛独両国に於て購入せし自動車と共に愈々八月下旬頃より開始する予定なるが同試運転は最初東海道を通過すべき計画なりしも実地調査の結果道路橋梁等に多数不完全の箇所ありしを以て今回は大阪を発し京都、大津、関ヶ原を経て名古屋に至り夫れより木曾、松本、軽井沢、高崎を過ぎて東京に至る事に変更し其行程日数は七日間なりと〉

明治44年8月8日（東日）

●軍用自動車は全く本邦の材料に成る，近く長途試運転をなすべき

〈大阪砲兵工廠に於て製作したる純日本式軍用自動車二両は長途の試運転をなすべく中仙道を突破する事昨報の如くなるが是れが製作に就いて頗る苦心せる砲兵工廠火砲製作所長長野中佐及び渡辺大尉の二氏を訪ひたるに今回の試運転は陸軍審査部が当工廠にて製作したる自動車は果して長途の用に供し得るや否を試験するものにて当工廠には何等準備もなく只審査部が勝手に其製作を検査するものにて積載物を弾丸とするか米とするか判明せず又塔乗者は審査部より来るべく未だ何等の命令に接せずと雖も本月末迄に其沙汰に接すべしと尚同車は陸軍省の命に依り昨年一月より製作に着手し一台五千元宛を費して去る四日出来上りたるものにて全く内地の材料のみを用ひ重量各二噸全速力を出せば一時間七里を疾走し得べく同車は速力よりも塔載力に重きを置き野砲ならば一門山砲ならば二門を運搬し得べしと（七日、大阪電話）〉

明治44年9月21日（名古屋）

●自動車試運転延期

〈曩きに大阪砲兵工廠に於て製造せし軍用自働車の長途運転は九月上旬挙行の計画なりしが過般暴風の為め名古屋飯田間の道路橋梁に多大の破損を生じ到底本月中には復旧の見込無き為め十月中旬迄延期することと為れり〉

明治44年10月5日（東日）

●気球隊の自動車女を轢殺す

〈一昨日午後四時四十分頃豊多摩郡千駄ヶ谷町八九五先を中野気球隊の自動車に工兵一等卒大島儀三郎（二四）が運転手となり数名の工兵を乗せて運転練習の際赤坂区青山南町五の七八薬種商増田栄蔵妻こと（二七）が車前を横断せんとして誤って顛倒したるを車輪にかけ胸腹部を轢きて肋骨三枚を折りしより新宿署より相川警部補出張して直にことを同町五百九の九永江医師方に擔ぎ込み応急手当を加へたる甲斐なく多量に吐血し同八時半頃遂に死亡したれば死体は夫栄蔵に引渡され大島は目下新宿署にて取締中なるが……中略……，自動車で往来の人を殺すと言ふ事は被害者が二歳か三歳の子供なら格別大人を轢殺すと言ふことは減多にないことなるが生憎く，ダラックと言ふ大きな車の上に多数兵士も乗り車の重量も格別重かった為に斯な事に成たらしい何にしても申訳のない次第である〉

明治44年10月11日（大朝）

●軍用自動車の大試運転

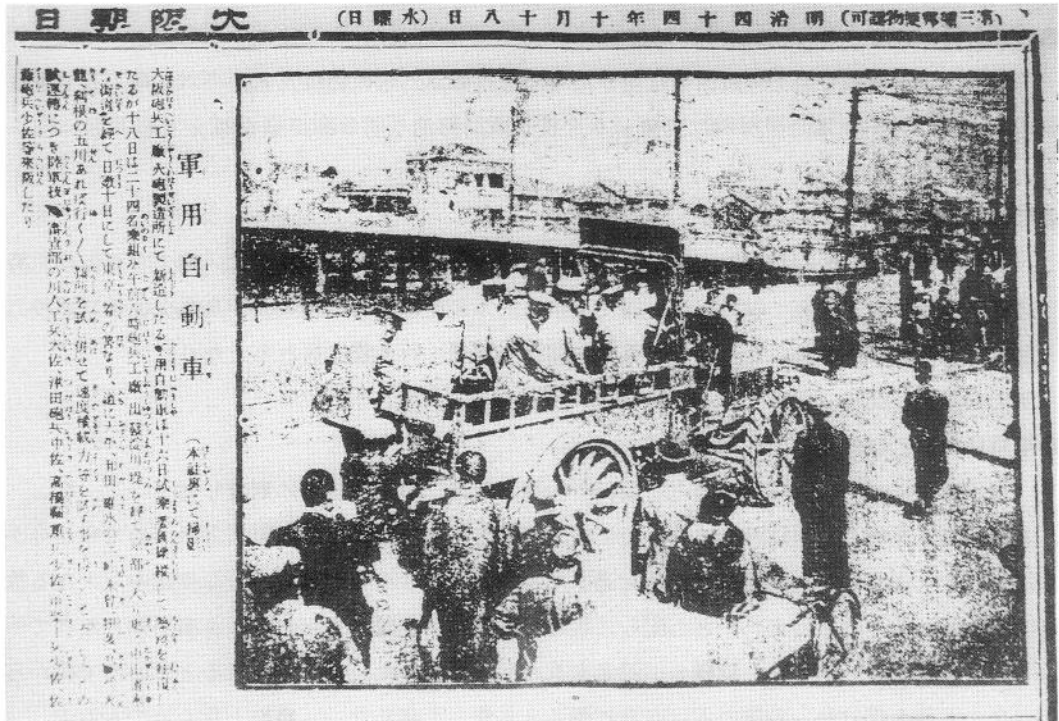
〈大阪砲兵工廠火砲製造所に於て本年試製したる軍用品運搬自動車二両（二噸積）と東京陸軍審査部に於て購入したる外国製の同自動車に荷物（米，麦等）を積載し大阪，東京間の比較大試運転を行ふこととなり火砲製造所長長野砲兵中佐以下同車製造に関係ある渡辺砲兵大尉，技師，技手，職工等は屢々積載試乗を終りて車体を立派に茶褐色に塗上げて出発期日を待ち居れるが多分来る二十日頃出発のこととなるべし尤も過般水害後の復旧工事もあれば大阪，東京間の道路は東海道を執るか又中仙道を執るかは今日にては未定なるも兎に角主催技術審査部より審査官たる將校以下若干名は試験用の自動車二三台を携へて不日来阪第一日は大阪出発淀川左岸枚方を通して大津方面に向ふこと丈は定まり居れり本試験の主要なる目的は大阪東京間の遠路中の難路通過にありて自動車運転の便否を検し濫に競走するにはあらず随って試乗車一両に付乗組員は四五名（途中損傷の場合に修繕する職工を含む）と定むる筈〉

明治44年10月18日（大朝）

●軍用自動車

〈大阪砲兵工廠火砲製造所にて新造したる軍用自動車は十六日試乗委員操縦して築港を往復したるが十八日は二十四名乗組み午前六時砲兵工廠出発淀川堤を経て京都に入り更に中山道木曾街道を経て日数十日にして東京着の筈なり，道は大平，和田，碓氷の三峠木曾，揖斐，長良，天竜，利根の五川あれば行く難所を試し併せて速度積載力等を試す事を得べしと云へり，この試運転につき陸軍技術審査部の川人工兵大佐わ津田砲兵中佐，高橋輜重兵少佐，中柴工兵少佐，佐藤砲兵少佐等来阪したり〉

(写真一三)「軍用自動車」(本社前にて撮影)
明治44年10月18日付大阪朝日新聞から



明治44年10月19日 (名古屋)

●軍用自動車来らむ

〈大阪砲兵工廠に於て製造したる軍用自動車は愈々十八日午前六時大阪出発廿四名の試乗委員職工等乗組み京都に入り中仙道木曾街道を経て廿七日東京着の予定なるが名古屋通過に付ては未だ第三師団に通報なきも多分廿日頃の予定なり因に今回の沿道には大平, 和田, 碓永の三峠木曾揖斐長良天竜利根の大川あれば速度及び積載力等を試験するに適せりと〉

明治44年10月22日 (大毎)

●軍用自動車通過

〈大阪砲兵工廠の軍用自動車二台は廿一日午前八時岐阜県恵那郡中津町を通過木曾路に向ひたり (岐阜来電)〉

明治44年10月25日 (大毎)

●自動車隊着発

〈大阪砲兵工廠を發せる自動車隊 (二十七名乗組) 二十三日夜到着二十四日午前和田峠を越え二十五日入京の予定なり (上諏訪来電)〉

明治44年10月25日 (信濃)

●陸軍自動車故障

〈陸軍技術審査部の自動車二両は二十三日下諏訪泊の予定にて午前六時飯田を發したるに三州街道出原にて車体に故障を生じ進行する能はず飯田町へ引返したり〉

●陸軍自動車来る

〈二十二日大平嶺を越えて飯田町に至りたる陸軍自動車二台に將校九名兵卒六名職工五名乗り組みて二十四日午後零時伊那町に到着せり今夜下諏訪町泊り明日和田嶺を越えて軽井沢に向ふ(二十四日伊那町特電)〉

●自動車諏訪着

〈軍用自動車今二十四日飯田出發午後三時下諏訪に着せり今夜亀屋旅館に一泊す明日午前六時下諏訪出發和田嶺を越えて岩村田町を経て東京に向ふ筈尚ほ一行は川人大佐高橋少佐及び將校二十名にして高橋少佐の談によれば長野県の道路は修築能く行き届き居れりとなり〉

明治44年10月26日(信濃)

●軍用自動車、自動車隊の見た道路

〈軍用自動車二両は廿四日午前六時飯田町出發、午後三時下諏訪町に到着した

▲山の如き見物 下諏訪町では前日の午後二時頃までには遅くも来る筈だと云ふので今か今かと沿道の人々何れも待ち受けたが二時を過ぎても三時を過ぎても来ない、若しや途中で大なる故障でも生じたのではあるまいかと心配して居る中に機関に故障があったと云ふ事が知れたので何れも張合を抜かして帰った、斯様云ふ記者も其の一人であった、愈々今日来ると云ふので朝から今か今かと待ち受けた、沿道の人々は昨日に優るとも決して劣らない、幾町となく恰で人の山

▲ソラ来た自動車 正午頃から市内は勿論、附近から見物の人々は街頭を眺めてまだかまだかと迂路々々して居る、聽て二時過ぎ岡谷方面から今二両の自動車が通過したと云ふ情報が来た、此の情報に依て沿道の人々はソラ来たと吾れ先きに駈け出したので其の混雜は大したもの、下諏訪署の巡查が制止しても群集は吾れ勝ちに押合ひへし合ひ巡查の制止を耳にも容れない、する中に二両の自動車は群集の中を堂々と進行し来り二両とも同地の高等旅館亀屋ホテルに到着した

▲自動車を追ふ 見物の群集は自動車の跡を追ふて自動車が亀屋の前に運転を停止すると忽ち其の周囲を包囲した中にも小学生などは得々然として恰かも吾が物の如な積りで頻りに嬉しがって居るなど愛らしい

▲高橋少佐の談 群集に包囲され微笑しつつ徐々に降車せる高橋少佐と語る、今度長途の試験を決行したるの軍事上極めて重大の研究を実際に行ふが為めであって積載量、速度などに就ては公言する能はざるものありと記者の問ひを避けた、此点以外は別に秘密を要せずとて語る、

▲初めての自動車 此の二両の自動車は大阪工廠で製造した、而かも我が陸軍に於て初めての製造、聊か今回の成績如何は軍事上に至大の影響を与ふるもので有って、夫れ故參謀本部からも二名の參謀を派遣されて居るし又其他からも見學將校が便乗されて居るが大阪出發以来大した故障もなく成績は極めて宜い

▲長野県の道路 一体モウ少し早く此の实地試験を行ふ筈で有った過般の水害で大分道路橋梁

が破壊されたから予定より遅れましたが長野県の道路と云ひ橋梁と云ひ実に善く手入れが出来て居て運転上何等の障害も来たさないのは愉快に堪へない、只一番閉口するのは交通不便な山間ほど荷馬車の多いので安全を保つため予定の速力を出す事が出来ないのだ

▲木曾峠と大平 吾妻から木曾峠を走破して大平峠にかかると運送馬車が多いので避讓其他に随分苦心したが、自動車には何等の障害が無かったのは一に操縦の巧みと技術の優良とを証するに足ると思う

▲愈よ和田峠 明日(廿五日)和田峠を超へて岩村田に入る予定である、夫れから碓氷峠を超へて東京に入るのは廿七日頃になる、話しはこれで終った、一行何れも土砂に塗れて目のみ光れど意気極めて旺盛(廿四日夕下諏訪にて松本生)

明治44年12月23日(扶桑)

●大砲の乗る自動車、自由に大砲が撃てる

〈大阪砲兵工廠にては今春陸軍技術審査部の命を受け軍用自動車二台を製作し之に川人大佐等十数名分乗し中仙道を東京まで試乗したる結果良好なる成績を収めたるが審査部にては更らに該自動車を如何なる程度までの運搬に使用するかにつき研究中にて一面是に据附くべき所謂自動車大砲の試作を同工廠に命ずべく内定したり這は常に自動車に常置して疾走中と雖も発砲し得るものにて遠からず試験砲として製作さるべしと〉

明治45年2月1日(信濃)

●雪中自動車、高田師団の新案

〈第十三師団長岡中將より陸軍技術審査部に依託し予ねて製作中なりし雪中自動車は今回竣成の上去る二十九日高田に到着せるを以て三十日試運転を施行せしが同日午前八時製作主任中柴工兵少佐指揮の下に自動車を高田駅構内より曳き出したり車体は普通陸軍運搬用の二十馬力自動車にして前輪は之れを取外し代るに圧雪に対しての第一考案たる陸軍工兵用鉄舟の半部の底に櫛と同様の木材を取付け後輪は滑りを防ぐ為めに木製車輪に角を出しあるが斯くて車体にある発動機は唸りを生じつつ全力を挙げ運転を試みたるも後部車輪の深く雪中に埋りて容易に進行せざるを以て已むなく歩兵第五十八聯隊兵十数名の応援を得て車体に綱を着け発動機の力を併せて之れを曳かしたるに漸く運転を始めたも途中雪は車輪に山の如く附着して時々進退の自由を失ひ其の都度之れを掘り出して午後五時過ぎ漸くに師団指令部構内に引込みたり昨三十一日より引続き第二第三の考案にて試運転を行ひしも未だ十分に成功を収むる域に達せざりき〉

明治45年2月6日(信濃)

●雪中自動車、未だ効果なし

〈第十三師団に於ける雪中自動車は陸軍技術審査部の中柴工兵少佐指揮の下に去月三十一日以来同師団司令部構内に於いて幾種かの方法に依り研究中にして四日の如き休日なるにも係らず頻りに試運転に努めたるも未だ完全の効果を奏するの運びに至らざることとて中柴少佐は一先帰京の上同日迄の実験に徴し大き考案を運らすこととせり〉

明治45年6月6日（伊勢）

●自動車調査委員

〈陸軍少將田中義一氏は軍事自動車調査委員着座仰付らる歩兵大佐奈良竹次氏外十二名同委員を命ぜらる〉

明治45年6月7日（伊勢）

●軍用自動車調査

〈世界自動車の発達に於ける運輸交通機関に多大の影響を来し列強は競うて之を軍用に採用しつつあり我が陸軍にても既に去る三十七八年戦役後之を採用する事に決し先陸軍技術審査部に於て輻重用自動車の研究を始め参考として独奥佛諸国の優良なる模範的運輸用自動車の設計に着手し既に砲兵工廠に於て製作し昨秋中仙道の長途乗用を試ろみて成功したり斯く輻重用自動車の技術的研究は大に進歩したれば更に一步を進め自動車の用兵的方面に關し即ち軍隊は運輸若くは通信用として自動車を使用する場合には如何なる方法によるか此等軍用自動車隊の編成区分如何、其の統轄及び有事の日に於ける徵発召集方法、運転手養成訓練に關する件等調査する為め既記の如く四日委員長以下夫々任命せられたるが陸軍にては自動車の技術的研究の大部を終り之を軍隊に實際使用するに就ても今遽に軍隊所用の全部を所弁することは経費之を許さざるを以て有事の日には民間自動車の供給を俟たざるものあれば民間自動車界も其影響を受けて多大の発展を促進するに至るべしと〉

明治45年6月8日（国民）

●列国自動車比較

〈我が陸軍技術審査部に於て佛、独、英、奥各国の模範的自動車を購入して軍用自動車の研究を為せる事は既報の如くなるが右研究の結果其の積載量は佛奥と我が日本製のもの一噸五百独英のもの二噸又發動機の馬力は日佛が二十独は三十六英は三十二奥は二十二を出せり今其他の主なる点に就て比較すれば

▲積載して登り得る傾斜 奥（七分の一）佛独英日（六分の一）▲平地一時間速力 佛ス式（約四里）佛ノーム式（三里）独（六里）英（七里）奥（五里）日（四里）▲一時間燃料消費量 英奥兩國は三升八合五勺他は三升三合▲燃料を補充せず行進し得る里程 佛ス式（七十五里）佛ノーム式（六十里）独（卅八里）英（卅六里）奥（五十里）日（六十里）

因に日本のものは曩きに中山道方面に試運転を挙行したる大阪砲兵工廠に於て製作せし純日本式のものなり〉

明治45年6月17日（伊勢）

●自働車補助制度

〈多年陸軍技術審査部に於て研究されたる軍用自動車は愈々野戦軍の輸送補助機関として採用する事に決定し過般該審査委員の任命を見るに至りたる次第なるが今後同審査委員の審議すべき事項は各般に亘り居りて頗る複雑を極め居れり而も如何に委員が調査審議したりとて我が陸軍現

時の形態にては戦時所要の自動車を平時より備付け置くが如きは経費の許さざるのみか数年を経過しなば車両其物は実用に適せざるに至るべければ先づ第一着手として民間自動車の進歩発達を促進し以て戦時所要の自動車を民間より徴発する方法を講ぜざるべからず而して此民間自動車の補助金を支給するの途を講ずるにあり我が陸軍省に於ても多分其方針を採用するに至るべしと某陸軍將校は語る

明治45年6月28日（大朝）

●軍用自動車

〈大阪砲兵工廠は範を外国に執りて平、戦時共輜重隊に属せしむべき軍需品積載量運搬用の自動車一両を試験して昨年大阪、東京間の試運転を行ひ以て種々難易或は便否等実地研究審査したる結果更に陸軍技術審査部と砲兵工廠の当局審議の後軍用品積載運搬用の自動車四両(每両異式)を純日本式に造ることに決し現今大砲製造所に於て所長長野砲兵大佐監督の下に渡辺砲兵大尉主任となりて製作中なりと聞く〉

明治45年7月14日（東朝）

●軍用自動車の方針

〈我が陸軍に於ける軍用自動車の研究は東京技術審査部に於て川人工兵大佐、大塚輜重兵中佐以下各審査官研究の結果本邦独特の純日本式軍用自動車を発明し已に大阪砲兵工廠に於て二両の製作を終りたれば遅くも八月中には曩に佛独兩國に於て購入したる二両の自動車と共に輓載力及速力の試験を為す予定なり本邦に於ける軍用自動車は未だ研究時代を脱せざるも歐洲列国の陸軍に於ては既に自動車を輸送機関の一として採用し其多くは鉄道貨車に類せるもの及び荷車に類せるものの二種あり其鉄道貨車に類せる自動車は主として鉄道線路より軍隊の所在地に至る所謂後方の輸送勤務に服し荷車に類せる自動車は稍軽便にして進退の自由意の如くなるが故に軍に随従して第一線に於ける糧食弾薬等の輸送を司り佛国の如きは更に進んで第一線に於ける負傷者の收容機関として衛生勤務上にも採用するに至りたるも本邦及滿洲の平原に於て使用せんとする自動車は地形及道路の關係上歐洲諸国の陸軍に於て使用する軍用自動車を直に採って使用する能はざる事情あり故に目下陸軍技術審査部に於て研究中なる軍用自動車は歐洲諸国の軍用自動車を折衷したるものにして其任務は主として鉄道線路より軍隊に達する所謂後方の輸送機関となし以て戦時の場合に於ける輜重の補助機関となす計画

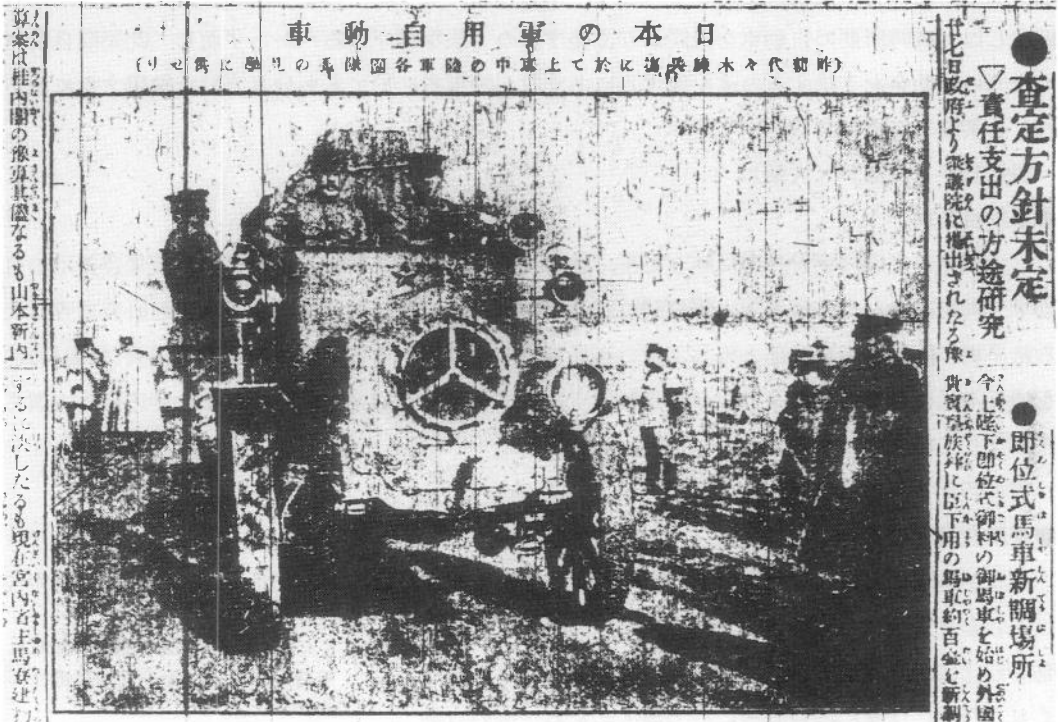
(写真一4) 蕃人雨傘を駱し自動車にて砲兵工廠より王子銃器製造所に向ふ

大正元年10月10日付やまと新聞から
(筆者注：日清戦争後清国から日本国に併合された台湾の、反乱を繰り返す現地人部族 曾長連を日本へ招き、近代的な鉄砲による軍事力を見せ、服従させようとしたときのこと。)



〔写真一五〕「日本の軍用自動車」

大正2年2月28日付東京朝日新聞から〔筆者注；フランス製スナイドル車 (Schneider) と推定される。〕



なりと云ふ)

明治45年7月16日 (やまと)

●軍用自動車江戸川へ飛び込む (乗組の兵士負傷す)

〈十五日午後一時頃第一師団輜重兵大隊軍曹今森正信 (二十三) を始め大塚支廠の曹長塩島藤一, 近衛輜重兵大塚軍曹渡辺秋太郎, 同上等兵奥野一郎等はノーム式自動車に乗じて芝白金なる弾薬庫に至り午後一時四十分小銃百二十を積載して帰途に就き飯田橋を渡りて小石川区新諏訪町に差し蒐りたるに折から伝通院方面より一両の自転車か風を切って疾走し来りアハヤ衝突せんとしたるより操縦の任に当れる今森軍曹は急遽ハンドルを左方に転じたる随力にて自動車は河中に陥り今森軍曹以下数名は脚部其他に打撲傷を負ひたるが通りかかりし近衛第三聯隊の兵士等がそれと見るより直に河中に入りて救助し負傷者は新諏訪町廿一材木商萩田辰五郎方にて砲兵工廠軍医の応急手当を受け帰隊せり大塚支廠よりは自動車総監小松少佐等現場に出張調査する所ありたり〉

大正元年9月18日 (馬関)

●満洲の軍用自動車, 中川歩兵大佐談

〈陸軍参謀本部附大佐中川幸助氏は今朝関釜連絡船より上陸全九時五十分発列車にて東上せり其談に曰く

▲輻重輸送力実験 予は久しく軍用自動車の研究を試み今回更らに満洲に於ける雨季中の輻重輸送力の試験を執行する目的を以て予が其指揮の任に当り少佐佐藤清勝氏以下將校数氏及び下士卒と共に客月十日東京を出発したり試験用の自動車は佛国スナドル製の鉄心と護謨心の二台及び我大阪砲兵工廠に製作せる東洋式の分二台とを携行せるが先づ十四日大連著後普蘭店より柳樹屯十五六里の間を試験せるが其間の鐵路は都督府に於て修築せるものにして午前五時二十分普蘭店を發して午前十一時金州に到着し金州よりは一時間にて柳樹屯に着せり以て満洲に於ける模範的好道路なるを認めたり

▲昌図以北の險難 北満洲一体殊に図昌以北の地は雨期間泥濘脛を没し満洲特有の難行程にして地質軟弱なる事夥しく止を得ず麦畑を進行すれば凹地に停車して前進後退更に其用を成さず益々深く喰込んで絶望長嘆の外なく普通道路に出づるを得ると雖も亦支那式の一輪車の轍痕深く二尺に及び其凹部に入る時は再び行動を妨げ偶ま車軸一輪たりとも地上を離れて宙に浮く時は盛に運転はすれども機関に故障を生じ泥濘機関を襲ふ時は全然輸送不可能となるを以て四日に一日の平均にて運転を休止せざる可からざるに至る

▲本邦製の優良

然るに遼陽以南の地は比較的地質が硬質なるため意外の良績を収め砂河附近の如き砂礫質なるため却て前者に優りたるが佛国製の鉄心の分よりはゴム心にて軸幅二十珊に余る我製品の方優良なるを認め橋梁道路の開発行はるるに於ては見る可き成績を挙げ可しと信ず露国にても北満洲に実験中なるが成績不良の由に聞く

▲我試験車送還 我内地にては東京を中心として千葉、青森、輕井沢、習志野迄実験せるが内地は地質硬固道路橋梁の完全の爲め満洲の比にあらず今回使用したる自動車四台は十八日大連發の嘉義丸にて廿二日門司着下関揚陸東京に送還する筈にて其際佐藤少佐も附添ひるを以て充分の説明ある可く就て乗用実験ある可しまた来十一月頃氷結季に於て実験せん事を望みつつあるを以て多分事実となって現はる可し云々

大正元年9月20日(馬関)

●軍用自動車送還

〈軍事上の効果を試験す可く曩きに參謀本部より満洲に送附せる軍用自動車四台は其後四平街より柳樹屯に到る満洲の野を馳驅し良好の成績を示し其の実効を認めたる上本日門司入港の嘉義丸にて輸送官勝野少佐監督の下に送還門司に揚陸直ちに貨車に移載東京に輸送せるが本邦軍事上の応用は今回を以て嚆矢なりと〉

大正2年2月9日(福岡)

●軍用自動車研究費

〈本邦氣球及飛行機の進歩發展僅々四ヶ年の日子を出でざるに先進国たる歐洲の其れと遜色なきに至りたりといへども這は飛行術上の進歩發達にして之を軍事上より見れば甚だ遺憾に堪へざるものあり陸軍省にては大正二年度に於て更に一步を進め軍事上の研究のため牽引自動車及修理

自動車を購求し飛行中如何なる場処に於て如何なる故障を生ずるも其場にて直に修理をなし軍用の目的を達せしめん計画なるが之に要する経費其他新研究費として大正二年度予算に三十万円の経費を要求し居れり

大正2年6月12日(時事)

●自動車隊編成、法案制定調査中

〈陸軍省にては予て戦時に於ける後方勤務に充つる為め民間の自動車を徴発使用せんと計画あり目下自動車保護法案の制定に就き調査中なるが之に伴ひ軍事運転手養成の必要あるを以て早晚欧米列強の諸制度を参酌して陸軍自動車隊を編成し当天下士卒中より運転手を選抜養成し以て戦時に於ける自動車運転の任に当らしめん方針なりと因に現今にては近衛第一師団に於て僅々六七名の下士卒を練習せしめつつあるに過ぎずと云ふ

大正2年6月23日(時事)

●民間自動車保護案、次期議会に提出せん

〈次期議会に提出すべく陸軍省に於て審議中なりし民間自動車保護法案は大体に於て脱稿せり保護方法に付独逸の如きは車体の構造及積載力等に制限を設け其条件を具備するものに対しては当初其価額の半額を与へ残る半額を五ヶ年間に分割して給付し所有者は五ヶ年後には価額の全部を回収し得る次第なるが我が国の保護は之を望むべからざるも当局は可及的所有者に対し有利なる保護方法に付き今尚研究を重ね居れりと

大正2年7月12日(時事)

●露蒙自動車計画、庫倫、恰克図関

〈モスクワに於て露蒙間自動車運転開始問題に関し協議会を開き最近蒙古旅行をなしたる貿易協議会長レセニコフ氏蒙古学者ポポーフ氏恰克図蒙商コルキン氏土木師ゼンジノフ氏医師ウエルゴン氏等出席して満洲里^{マンジュリア}駅と庫倫間に於ける自動車運転の計画を聴取せり此計画は初め露国護境守備隊の实地踏査の結果に基きたるものにして其距離八百露里に達す通路は概ね平坦にして唯五十露里余の砂地を含むのみ庫倫より満洲里駅の間を駱駝若くは牛にて旅行する時は少くとも二十日以上を費さざるべからざれども自動車に依れば僅々二日間を要するに過ぎず而して自動車の開通は一方貨物の集散を露国鉄道に吸収するの利あり又天然物豊富にして且つ軍路上重大なる關係を有する該地方に向つて露国の勢力を扶殖することを得べし然れども此計画は反対者多し其理由とする所は要するに満洲里駅庫倫間の開通は露国商品をして八百露里程東へ迂回せしめ然る後再び之を西に仕向くる訳なれば従つて距離遠大となり外国人の為には便利ならんも露国に取りては不利益なり且又満洲里駅は支那国境に近くして従来露支の繋争地なれば此地を以て起点となすは好ましからずといふに在て寧ろ之を庫倫恰克図ウエルフネウヂンスク駅間に運転して西比利亞線との連絡を図るの有望なるに如かずとの意見に賛成せり此通路は地勢良好なれば既に個人の自動車を往復するものあり距離は庫倫より恰克図まで二百五十露里にしてウエルフネウヂンスク駅迄の全里程八百露里なり蒙古へ輸出さるる物品に対しては去る五月一日よりウエルフネウヂンス

ク駅まで鉄道運賃の特減を実施し居れば自動車の開通は将来露蒙貿易発展上に多大の効果を齎すや論を俟たずされば該会議は案を具して露国当局者蒙古政府并に該地方実業家に向ひ建議する所ありたりと伝ふ（七月五日ハルビン露蒙生）（筆者注：露里一ベルタス、1 km強）

大正2年7月17日（時事）

●軍用自動車成る、大阪砲兵工廠

〈大阪砲兵工廠に於て製作したる軍用自動車は其後屢修正に修正を加へ漸く完全なるものを製造し既に六両に及びたるより本年は輜重隊中に自動車隊を編成し大演習に参加せしめて実地に応用せんと目下頻に計画中なるが自動車の任務は後方勤務たる輜重隊に属し糧食彈藥馬料其他軍需品を運搬するにありて一両の自動車にて約十馬両の重量五百貫位のもの極めて短時間にて運搬し得るも道路の狹隘善悪等に依りて自動車を使用する能はざる場合もあり旁々目下其研究中なり而して陸軍省にては大阪東京兩師団の輜重隊に自動車を交付し運転操縦其他に付き研究を為さしめ居るが近き将来に於て馬匹車両の運搬を全然自動車を以て使用する場合あれば速度は勿論使用人員に於て多大の利益あるべしと一將官は語れり（大阪十六日電話）

大正2年8月23日（時事）

●軍用自動車演習、本邦式自動車試験

〈陸軍省にては来月中旬千葉栃木兩県下に於て大阪砲兵工廠製作に係る本邦式軍用自動車の輜重行進をなすべく目下右兩県に向つて演習地域の交渉中なるが参加自動車の数は七台にして期日は約五日間なりと〉

大正2年9月17日（東日）

●軍用自動車の演習

〈埼玉、群馬兩県下に亘る軍用自動車演習は十六日より開始し、前夜来熊谷に宿営したる南軍は十六日朝北軍を神流川まで追撃し南北兩軍川を狭みて大激戦を為し北軍遂に敗北高崎方面に退却南軍は神流川沿岸に野営したるも彈藥糧食共に欠亡したるため俄に自動車九台に彈藥糧食を積載し戦事編成の隊伍を整へ熊谷まで輸送し来たることに仮想し其の本部を今井屋旅館に置き自動車全部は同町氷川神社境内に野営したり尚十七日午前八時半熊谷を出発中仙道を走りて藤岡町の本隊に彈藥を供給する予定行動を取る筈なり（十六日、熊谷電話）

大正2年9月17日（国民、埼玉版）

●陸軍自動車隊の演習、三日間熊谷に滞在

〈十六日午前五時東京青山練兵場を出発したる陸軍の自動車縦列演習隊の一行は千住、草加、幸手を経て午後三時熊谷町に到着せり一行は騎兵少佐蒲穆氏かばく以下の將校下士卒五十名自動車九両にして田島屋旅館に投宿せり同隊は十九日朝熊谷を出発中仙道を西に大里郡深谷町児玉郡本庄町を経て群馬県藤岡町に至り熊谷に帰る予定なるが神流川の水量の都合にて藤岡に至る能はざる時は同河岸より直に引返す筈なり尚十八日以降の演習日割如左

▲十八日 熊谷滞在上朝熊谷出発大黒郡奈良梨、○○、小前田の諸村を経て熊谷に帰る▲十

九日 熊谷出発比企郡松山，入間郡川越，入間川を経て同郡扇町屋に至る▲二十日 扇町屋出発所沢を経て東京に帰着

因に前記蒲騎兵少佐は去十二日熊谷聯区司令部本県庁並に通過町村の郡役場を訪問し道路の修理等諸般の打合を遂たり

大正2年9月18日（国民，埼玉版）

●自動車隊の宿舎

〈陸軍の自動車従列演習の一隊は熊谷町に滞在中のことは既報の通りなるが其の宿舎及び隊員の氏名は左の如し

▲本部（今井屋旅館）引田中佐蒲少佐▲自動車研究調査委員（松村屋旅館）柴少將田村大佐江川大佐井上大佐平瀬中佐須崎中佐▲見学者（田島屋旅館）渋谷中將布施大佐山崎大佐北川少佐秋山少佐▲下士卒（高橋布施田の二旅館）▲職工（池田屋旅館）

なお自動車九両の置場は高城神社境内にて又渋谷中將は一日後れ十七日来熊せり

大正2年9月18日（埼玉）

●陸軍自動車演習

〈埼玉群馬両県下に跨る軍用自動車演習は十六日より開始せられたるが前夜来熊谷に宿したる南軍は十六日朝北軍（敵に仮想す）を神流川沿岸に追撃し南北両軍此河を狭んで大激戦をなしたる結果北軍遂に敗北し高崎方面に退却南軍は神流川沿岸に野営したるも既に弾薬糧食共欠乏したる為め遽かに自働車隊九台に糧食を積載し戦時編成の隊伍を整へ午前五時東京出発発動機の爆声勇しく仲仙道を熊谷まで輸送し来たる事に仮想し其本部を今井屋旅館に置き自動車隊は全部同町氷川神社境内に其夜営したるが十七日には午前八時半熊谷を出発仲仙道を走り深谷本庄を経て神流川沿岸にある本隊に弾薬糧食等を供給する予定行動をとる筈なり（十六日夜松壽生）

大正2年10月13日（東日）

●自動車隊の独立

〈陸軍の製造に係る軍用自動車の成績は過般熊谷方面に於ける実験によりて其の頗る良好なるを知り既に実用の時期に達したる今日現状を持す可らずとて航空隊無線電信隊同様一個の自動車隊を編成することなり明年度予算に之が新編成費を要求したりと〉

大正2年12月10日（東日）

●自動車隊の編成

〈陸軍省が来年度より独立編成の計画なりし軍用自動車隊は財源の都合にて閣議不成立と決定せるが大坂砲兵工廠製造の自動車既に十台を数ふるに至りたる今日之が運用の研究を忽諾に附するは甚だしき遺憾にして現在の如く師団等より若干の下士卒を借用し来りて一時を間に合せ居るに過ぎざる有様にては其の大成覚束なきを以て来年度より従来無経費なりし研究会費の計上あるを機会とし小規模ながら一箇の自動車隊を編成する由隊の編成として特に経費の計上なき限り素より独立隊とは稱し難けれども之を常設的のものとして下士卒近衛及び一師団より選抜し將校は

研究会委員をして之に当らしむるも営舎の所在は未だ決定するに至らずといふ

大正2年12月12日（東日）

●自動車奨励法案

〈自動車は軍事上軍の統率に関する任務兵員の輸送貨物の運搬として重要な作用あり従って平時に於て之を多く製作しめ戦時に徴発して軍用に供するは頗る策の得たるものにして既に独，佛，英の諸国は民間の自動車に対し補助金を交付し之が工業及び所有を奨励し居るを以て我陸軍省も数年前より此の計画

に基き法律を制定すべく諸列強の現行法を参照し既に成案を得るに至りたり最も之れが提案に就ては財政上の都合を顧慮する必要上尚ほ未定なるが内容は過般熊谷地方に於て行はれたる演習の結果列強制度を参酌して之に国情を加味したるを以て列強のものとは多少相違あるも補助に就ては列強同様製作補助運転補助共に之を認むべく単一式を採るか制定上の基礎に就ては当分先づ数式に依るべきか積載量に就ては交通関係よりして列強より少量のものを採るに至るべく補助金額に就ては全く未定なれど陸軍省の管理年限は四五年の期間に定めあらるべしといふ

大正2年12月16日（東日）

●軍用自動車試験班

〈軍用自動車は先年来大阪砲兵工廠に於て製造中なりしが既に六両は竣成し残れる四両も近々竣成の筈なるが故に陸軍省にては明年度より兎も角自動車隊を編成せんと希望にて之が経費を明年度予算に計上要求する所ありたるも予算会議に於て否決せられ単に研究費として若干の支給を受くる事となりたるを以て来年度より近衛輜重兵大隊又は輜重兵第一大隊の中何れかに試験班を設置し兩大隊中の下士卒中入営前其の特技あるものを選抜して之が研究を為さしむべしと〉

4. ま と め

前記資料記事集で確認できたことを列記すると、次のとおりである。

(1) 明治37・8年の日露戦争でロシア軍は、既に大量の自動車をドイツから調達し、満洲の広野に導入しようと準備していた。

(2) 日本陸軍でも日露戦争に小荷物運搬自動車の採用が検討されていた。

(3) 明治41年1月、フランスのノーム自動車会社から軍用自動車（トラック）2両を輸入した。この会社は新設のもので、じきに解散したという。なぜ、こんな新設無名な会社の製品を2万3千円（2両）もの高額で購入したのか、大きな疑問である。明治40年はじめ帝国ホテルに駐在し、ロンドン型2階建バスの大量売り込みを盛に行い、大隈重信総理をはじめ政財界トップとも交渉

（写真一六）国産軍用車第一号
和田峠絶頂における記念写真



のあったフランスの某自動車会社代表者カータス男爵が、関係していたのではないかと時期的に思はれる。(本研究第11報, 本学論叢第17号参照)

(4) 明治41年7・8月, 第1回軍用自動車試験大旅行を東京・青森間往復, ノーム車2両10余人乗り組みで行い, 道路の悪条件から予定は大幅に遅れ, 旅程の一部は次のとおりであった。

東京発 宇都宮通過 福島泊 仙台着発 青森着・発 仙台着・発 宇都宮泊 東京着
7/22 ~ 7/24 ~ 7/27 ~ 7/29・30・31 ~ 8/7・8・9 ~ 8/15・16・17・18 ~ 8/20 ~ 8/21

(5) 明治43年2・3月, 第2回軍用自動車試験大旅行を東京・盛岡間往復, 4両17人乗り組みで行われ, 2月17日東京発3月14日東京帰着。前回の悪路で懲りたのか, 今回は水戸経由の浜街道で仙台へ。また, 前回と同様な夏期の大雨による橋梁流失などを避ける意味か, 乾期の2・3月に行ったが, 悪道路と時期遅れの雪とで悩まされた結果は前回どおりであった。

東京発 仙台着発 盛岡着発 仙台着発 東京着
2/17—(9日)—2/25・26—(9日)—3/6・7—(4日)—3/10・11—(4日)—3/14

(6) 明治44年7月, 大阪砲兵工廠において, 最初の国産軍用自動車, 2トン積トラック2両が完成した。

(7) 明治44年10月, 第3回軍用自動車試験大旅行が前記国産軍用トラックの東京回送を兼ね, 大阪・東京間片道, 2両20余人乗り組みで行い, 10月18日大阪発同月27日東京着。旅程の一部判ったところは次のとおりであった。

大阪発 京都通過 中津町通過 大平嶺越え飯田町泊(車両故障) 下諏訪泊 和田峠越え (碓氷峠越え 東京着)
10/18 ~ 10/21 ~ 10/22・10/23 ~ 10/24 ~ 10/25 ~ 10/27

(注:名古屋通過については, 扶桑・新愛知・名古屋の地元3新聞とも報道していないので, 中山道を美濃太田から中津川への行程をとったものと思はれる。)

(8) 明治45年2月, 高田師団で雪中軍用自動車の試運転をするも失敗。

(9) 明治45年6月, 軍用自動車調査委員会が正式に発令され, 委員長陸軍少將田中義一以下12人の委員編成。

(10) 明治45年6月, 大阪砲兵工廠にて軍用トラックの第2次製作開始, 大正2年7月完成。

(11) 大正元年8・9月, 満洲にて軍用自動車雨季泥濘地試験。スナイドル車2両, 国産2両の計4両にて, 大正元年8月10日東京発, 同月14日大連着現地テスト, 同月18日大連発船便, 同月20日門司帰着列車にて東京へ。

(12) 大正2年9月, 軍用自動車隊の初演習。9月16日から20日までの5日間, 埼玉・群馬両県下熊谷・高崎町一帯にて, 輸入・国産軍用トラック9両参加。

以上が今回の資料調査と研究により得られたものであるが, 軍用自動車という軍事秘密にも関する事項で, 特に一般新聞記事扱いされにくい点から, 情報不足を感ずる点は残念である。

第13報 以上

第14報 日本へ初めて現れた自動車, 明治31年1月(1898)

1. 概 説

日本へ最初に渡来した自動車として、従来からの自動車史では明治33年(1900)アメリカ・カリフォルニア州の在住日本人会が、東宮殿下(後の大正天皇)のご成婚を記念して献上したアメリカ製電気自動車^{※1)}だとか、また、同じころ横浜旧居留地のアメリカ人商社が輸入したアメリカ製蒸気自動車ロコモビル(Locomobile)だとか述べられていた。しかし、今ひとつ古い明治31年2月、日本で発行された在留フランス人画家ビゴ^{※2)}による画集“IN THE FAR EAST”(極東にて)中に“La premiere automobile faisant son apparition à Tokio”(東京に初めて現れた自動車)の画があることを約10年前に知ってから、これこそ日本最初の自動車であろうとその裏付け資料調査を考えていたが、策がないまま今日まで経過してしまった。

ところが本年始め(1987)、たまたま日本の人力車等乗物の歴史的資料を調査されていた齊藤俊彦氏^{※3)}により、当時の日本の新聞から関連事項の記事が発見された旨伝達を受け、筆者も早速確認の調査を行い長年の懸案を一挙に解決することができた。ここに齊藤氏の努力に敬意を表するとともに、確認できた関連資料をまとめてここに発表するものである。

注1) 本学論叢第10号(1980)、本研究第4報参照。

注2) GEORGES BIGOT(1860~1927)、明治15~32年(1882~1899)在日。

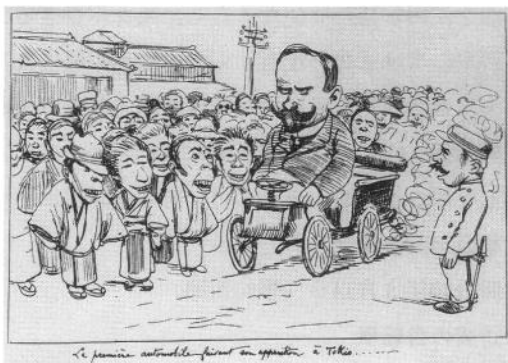
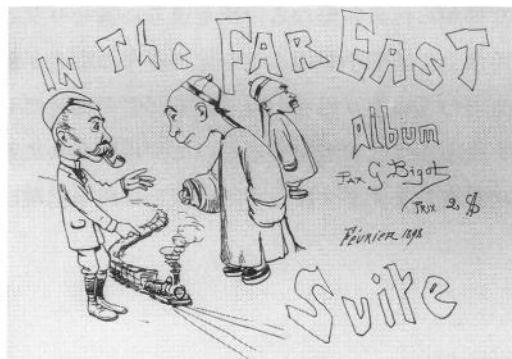
注3) NHK 資料部主査、神奈川県藤沢市在住。

2. 資料記事集

(写真-8) ビゴの画集中から、“東京に初めて現れた自動車”

(写真-7) ビゴの画集“極東にて”2月号の表紙
(筆者注；Fevrier 1898の文字に注意。)

(筆者注；丸ハンドルに注目、パネル車は1898年式から丸ハンドルを初めて採用した。)

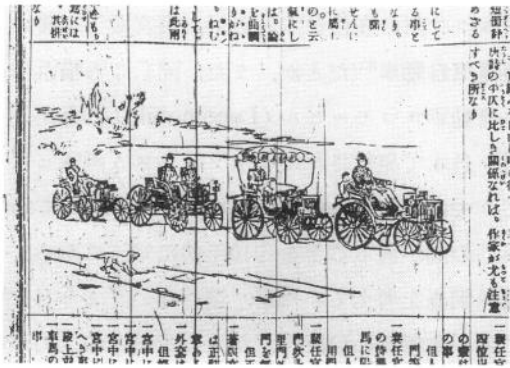


(写真一9) 自動馬車

明治30年1月1日付東京朝日新聞から



(写真一10) 同左



明治30年1月1日 (東京日日新聞)

●自働馬車

〈昨年九月米国紐育コスモポリタン雑誌社は三千弗の懸賞を以て広く自働馬車の新案を求めたり之に應ずるもの百を以て数ふ該社は左の考案を以て最一と為せり則ち石油発動機の方法に依り一時間の速力は汽車に半するを得べく自在に運転し得る方法なれば如何なる雑沓の場処に使用するも更に危険の憂なく既に米国ワシントン府にては之を郵便物の集配用に供し英国亦盛んに之を使用すと云ふ。〉

明治30年1月27日 (時事新報)

●巴里に於て新流行の自動車

〈欧米に於ては馬車に代ふるに電気或は石油を原動力とせる自動車を以てせんと種々の計画現はれしが今度巴里府に於て新に流行を催はさんとするものは図に示せるが如き形にて其動力には石油を使用し甚だ簡便なると共に馬を用ひざるより自から往来頻繁なる市街を遣るに適せり又この新案の車は五馬力を有すと云へば速力軽快なる可き上に運転手を用ふるを以て従來の馭者が職を失ふの虞なかる可し但し新自動車の欠点は是れまでの馬車より馬を引離したる其儘の体裁にして外見甚だ妙ならざること存ずれども追々工夫を凝らさば此欠点を去るを以て実用娛樂共に適するを得ること難からざる可し若し此新案にして功を奏しますます流行するに至らば馬車營業は大革命を及ぼすならんと云ふ〉

明治30年3月14日 (報知新聞)

●新案の自転車

〈来る四月下旬横浜居留地廿八番館に見本として輸入すべき石油発動自転車は佛国ハバ製造所

(写真-11) 巴里に於て新流行の自動車

明治30年1月27日付時事新報から



(写真-12) 石油自動車

明治31年3月5日付報知新聞から



に於て發明したるものにして大抵四人を乗せ一時間廿八哩余を走り得べく坂の昇降等自在にして頗る便利なるが其価額七百弗なりと(筆者注、当時の外国為替相場1弗^{ドル}二円三錢五厘)

明治31年1月11日(東京朝日新聞)

●自動車初輸入

〈佛国ブイ機械製造所テブネ技師の佛国に於て馬車の代りに發明されしトモビルと称する石油の発動にて自由自在に運転する自動車一両を見本として携へ来りしが其最高速度は一時間三十キロメートルを駛する由〉

明治31年1月12日(東京朝日新聞)

●佛人製造所計画

〈佛国ブイ機械製造所の改正条約実施を待ちて我内地に大砲及び諸機械製造所を設立せんとの計画あり同所技師テブネ氏は府下へ支店建設の爲め先頃渡来し目下築地メトロポーホテルに滞在中なるが同氏は清国旅順軍港を築造したる有名のテブネ技師の令弟なりといへり〉

明治31年2月7日(東京朝日新聞)

●石油自動車の試運転

〈佛国に於て従来実用に供せられつつある石油インジン自動車は普通四輪車にして馬車の馬無きものの如き形状あり軌道に依らず市街を自由に行動し得らるる由なるが這回佛人テブネなる者該車を我国に輸入せんと実物を携へ来朝目下築地ホテルメトロポルンに止宿し居り昨日午後一時築地上野間に試運転を行ひたるが我国人の意に適せんには二百万円の資本を以て我国に製造所を設立し広く需要に応ずる筈なりと〉

明治31年2月8日(東京朝日新聞)

●自動車の流行

〔英国^{ロンドン}倫敦に馬車に代用する自動車発明されたるも同車に装置の電気運転機械の素人の手に操縦し難きより初め流行するに至らざりしが発明者の更に意匠を凝して何人にも操縦し得べきやうに其機械を改良したれば俄に非常の流行と為り^{ロンドン}倫敦のみならず諸市に於ける流行実に烈しく馬車賃貸営業者の恐慌狼狽一方ならず百万之を防がんとせしも到底實際の便益に敵する能はず初め個人の使用に過ぎざりしもの今は公衆一般の用に供せられ奔走に忙はしき商売医師は勿論上流貴族社会にても自動車を蔑視するの風なく使用者日々に増加して製造者の繁忙云はん方なしと^{ロンドン}倫敦通信に見ゆ〕

明治31年3月5日（報知新聞）

●石油自動車

〔図に示せるものは佛国巴里府に流行しつつある石油自動車にして最早珍らしいといふ程のものにはあらねど此頃商用を帯びて渡来せる佛人シーヴェネ氏が携へ来れるものなり都下に此の軽快なる自動車の往復するを見るは之れを嚆矢とす其構造は当今用ふる所の馬車の馬に代ふるに石油発動機を以てしたるものにて片手にハンドルを把り労することなくして急進除行停止等意の如くならざるはなし殊に四個の車輪には道路の凹凸及び砂礫に觸るも劇動せざるやう堅牢なる空気入の護膜を嵌入したれば乗心地の好きこと馬車の比にあらず加え五馬力以上の自動力を有すれ

（写真-13）競売広告

明治31年3月6日付時事新報から
 （筆者注：同年3月8日、10日の時事新報及び3月10日付読売新聞にも同広告あり。）

<p>増 銭 銀</p> <p>者にし</p>	<p>増 銭 銀</p> <p>に文に 日に頭 英者精</p>	<p>新 販 廣 告</p> <p>奈ル十一日午後第二時東京探區豊後居地壹番...</p>
<p>謝 近 火 御 見 舞</p> <p>有近火之節早速御見舞下...</p>	<p>本車ノ毎日午後二時ヨリ四時迄ノ間前記ホテルメ...</p>	<p>保 險</p> <p>資本 保險 資本</p>

（写真-14）PUBLIC AUCTION
 広告
 1898, MARCH 3, 4, 5, 6, 8, 9, 10の7回, THE JAPAN TIMES 紙から
 （筆者注：A PETROLEUM MOTOR CARRIAGE, PANHARD LEVASSOR, Mail Phaeton Shap 等の文字に注意。）

A GRAND PIANO, by BROADWOOD & Sons.

SALE OF MOTOR CARRIAGE.

JNO. W. HALL

has received instructions TO SELL BY PUBLIC AUCTION, AT THE HOTEL METROPOLE, 1, Tenkiji, Tokyo, On FRIDAY, the 11th Instant, At 2 p.m. A PETROLEUM MOTOR CARRIAGE, Quite new. Just imported. Manufactured by PANHARD & LEVASSOR, Paris.

K

BE

THIS FIRE BRIDGE, SECRET VIEW

The only Motor Carriage in Japan. Mail Phaeton Shape. Excellent Fittings. Rubber tyre wheels. This Carriage will run for 20 hours at an expense of 40 sen. Travels at speed of 20 miles per hour. Perfectly safe. Easy to work and guide through unlevel thoroughfares. The Carriage may be inspected daily from 2 to 4 p.m. at the Hotel Metropole. Special trials may be arranged upon application to the Auctioneer.

Visa SP.

ば軽快言ふ計りなし創造の當時には其外見美妙ならずとの非難もありしが爾来種々意匠を凝らしたる結果体裁大に調ひ実用と娯楽とに供するに足るべきものとなれり同氏の所有せるものの如き其一なり氏は目下築地居留地クラブホテルに宿泊せるが望人あらば売却するも可なりと語り居れりと

明治31年 3月 5日 (報知新聞)

●石油発動車の競売

〈居留地五十八番館ホール商会にて今回巴里パンハート、レバソール社の製造に係る新式石油発動車の輸入し来りたれば来る十一日午後二時より東京築地居留地一番メトロポールホテルに於て競売に付する由〉

明治31年 3月 5日 (読売新聞)

●石油動機

〈横浜居留地五十八番館ホール商会にては今回巴里パンハート、レバソール社の製造に係る新式石油動機車の輸入を為し来る十一日午後二時より東京築地居留地一番メトロポールホテルに於て競売に付する由なるが該車は一時間二十哩の速力を以て二十時間僅に四十銭の費用にて十分なる上取扱ひ軽便にして緩急自在なれば群集の道路とても安全に通行し得べしと〉

明治31年 3月 13日 (報知新聞)

●石油動機車の売拂

〈横浜居留地五十八番館に於て一昨日築地居留地一番館に於て石油動機車の競売を為せしに当日五千三百円迄入札せしものありしも同機は六千円以上ならでは売却し難しとのことにて遂に落札せざりし〉

〔附 記〕

本件の資料中、明治31年分の記事は既に齊藤俊彦氏執筆により、『ペールを脱いだ幻の第1号車』と題して下記雑誌に解説済みで、この第14報は筆者の調査によるその前年(明治30年)の資料をこれに加え、フランス・パナール車東京出現の一連の資料集としたものである。

記

自動車とその世界 from TOYOTA No. 222, 1987年 3月, トヨタ自動車株式会社 広報部発行

第14報 以上